ユーフォリアの大魔導師

梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユーフォリアの大魔導師

【Ｎコード】

Ｎ９５８７Ｓ

【作者名】

梅

【あらすじ】

神々と精霊達に愛された魔法と剣の世界、ユーフォリア。”大切な人と会う為”に宮廷魔導師を目指して学院への入学を目指すものの、五年経ってもまだ入学できない落ちこぼれのフィリアス・アイシェールは現在二十歳。それでも、大切な人と胸を張って会える日を諦めずに、大好きな精霊達や王都の人達と緩く楽しく、時々ピンチやサバイバルもごっちゃにして毎日を生きてゆくお話。※処女作品ですので、アドバイス等あれば是非お寄せください！参考にさせて頂きます！

五年目の落ちこぼれ

「……またか？」
「またらしい。　まあ、あの有様は最早この街の恒例行事というか……なあ？」

白い壁にシャンデリア、煌びやかな銀食器と少女達の華やいだ声が開店から閉店まで響き渡る、街では美味だとそこそこ有名な洋菓子店の日常も、今日ばかりはたった一人の為にオーナー直々の通達で開店休業中である。

”王立魔導学院結果発表の為、貸切”

そんな文句が入り口のプレートに掲げられ、最近この街に最近越してきた者で無い限り、この文句を見ては”ああ、今年もか……”と、皆一様にしたり顔で納得し帰って行く。
だからと言って栄えある学院に誰か合格したのかと言えば店内の雰囲気を見ればそうで無い事くらい容易に察せるだろう。店の中央に置かれた丸テーブルにはこの店で売り出されているケーキや焼き菓子、ゼリー等が無秩序にこれでもかと並べられており、それら全てを片っ端から平らげている涙でぐっちゃぐちゃ、べちょべちょな顔は誰がどう控えめに、且つお世辞の色を強くして見たところで嬉し泣きには見えず、一人の胃袋の中へ恐るべきスピードで吸い込まれてゆく哀れなデザートを作った菓子職人達が、厨房から苦笑混じりの視線を鬼気迫る背中に向けて居る事にも気付いてはいない。

「にしても、何でそこまで上位魔導師（ハイウィザード）に拘るんだ？」
「あー……絶対会いに行くって約束した人が王城に居るって前聞いたな」
「王城か、なら確かに上位魔導師はぴったりだろうが……」

（（……別の職で王城に仕えた方がいいんじゃなかろうか……））

今此処に居る全員の共通意見だと誰もが理解していながらも、彼女にそうと誰もが伝えず、あまつさえ足りなくなってきたスイーツを端からそれとなく補充してやるという光景からも、皆が彼女を応援しているという他ならぬ証…ではあるのだが。
如何せん、悲しいのか悔しいのか、あるいは唸っているのか美味しくて喜んでいるのか、それとも全部詰め込んだ結果なのか、年頃の女の子がする顔ではない表情を惜しげもなく晒し、時間が長引く程に皆はそっと視線を外すのも無理からぬ事ではある。

神々と万物の精霊達に愛された世界、ユーフォリア。

様々な文化や政治体制を持つ国が存在する中、そんな国々の頂点に立つ小さな国がある。
ラティリカ王国は決して大きいとはいえず、どちらかと言えば小

国の位置であるこの国が軍事力にも優れた大国からも畏敬の念を込めて”始まりの国”と呼ばれているのには理由があった。
それは、この世界が生まれた際、どの存在よりもか弱く、儚い存在であった人間へ神々が世界の息吹と祝福を感じ取れるように、と今日では魔力(マナ)と皆が呼び使う贈り物を施した場所と謳われる”聖域の森”が存在する為。
最早御伽噺の域とまでなった創世神話だが、実際に森は存在するし、何よりもその国には強い力を持った魔導師(ウィザード)の出生率が他国より圧倒的に多い。そして事実、ラティリカは沢山の魔力で満ち溢れ、王国も魔導師の育成に積極的とくれば、自然と高位の魔導師に憧れる者達は大陸中から王国へと集い始める。
そうして、より一層魔法で守られた王国は規模としては小さめながらも不可侵の国として他国に認知されているのだ。

”王立魔導学院”とは王国の王都に設立された学院であり、その名の通り王立。
魔導に関する様々な情報が揃い、より一層自らの力を磨き学ぶ為に魔導師の卵が集う学院である。
ただし、入学する為には筆記よりもある程度以上の魔力をその身に宿している事、なおかつコントロールできる事が最低条件であり、試験には王城、王族や貴族に仕え通常なら見る事も叶わない上位魔導師(ハイウィザード)達が直々に選定を行う厳しさから”一度落ちたら二度と合格しない”と囁かれ、毎年肩を落とし王国を去る者が後を絶たない狭き門。

なのだが。
なのであるのだが。
甘酸っぱい果肉が魅力的な、リリルの実を沢山使ったショートケーキに齧り付くフィリアス・アイシェールは今回の試験が五度目。
つまり六浪確定真っ只中のどん底状態。

何度不合格通知を与えられても、大泣きして暴飲暴食に走った後、次の年には懲りずに受験する図太さに、三度目の受験をする頃にはすっかりと”落ちこぼれ”として名前だけが一人歩きした挙句どんと居座っており、今では何処に行くにも誰かしらが声を掛けてくる有様である。

だが、街の人々が彼女をからかいこそすれど、決して貶したりしないのは彼女が見せる努力と、そして何より誰よりも魔力を齎してくれる存在、精霊や神を愛している事が分かるから。

だからこそ、フィリアスが働く普段はケチな洋菓子店のオーナーも、この日だけは”万年不合格の落ちこぼれ”の為だけに店を開けるのだ。

「ほれ、フィリ。 幾ら今年”も”ダメだったってな、そんなに食ってたら腹ァ壊すぜ？」

「……二十歳の、年頃の、それも傷心中の女性に対して言う言葉がソレですか」

「普通の、二十歳の女の子はそんな泣き方しねえっての」

「そこはかとない悪意を感じます。…あ、これおいしい」

魔力（マナ）をその身体に多く宿す者は、金が銀の髪に青、緑、金の瞳を持つ者が大半である。

魔導師（ウィザード）の集まる此処王国もそういった色や近色を持つ者が往々にして多く、実際に上位魔導師（ハイウィザード）程になると、ほぼ全員と言って良い程にそれ以外の色を持つ者を見かけない程なのだ。

だが、背中の真ん中あたりまで伸びたフィリアスの髪は、銀と呼ぶにはちょっと曖昧な灰色だし、この大陸では珍しい瞳とは言え、魔力の強さは疑われる薄桃色。

つまり、外見からしても易々と学院に入学出来そうな魔力の持ち

主とは、とてもじゃないが誰も思わない外見である。
そんな瞳を泣き腫らした目で兎よろしく真っ赤にさせながらも、春の新作ケーキがお気に召したらしい。表情を綻ばせるフィリアスに菓子職人は得意気と鼻を鳴らして見せた。

「よーし、来年こそは絶対に受かるんだからー！」
「……ま、まあ頑張りな」

美味なスイーツに再びやる気を出したフィリアスが声高らかと宣言する姿には、流石に閉口するしかなかったが。

魔力そのものと言っても過言ではない精霊達、世界を見守る神々が最も愛するのは、”自分の思いを貫く強さ”を持った者だという事を職人が思い出したのは、ずっと、ずっと先の事。

五年目の落ちこぼれ（後書き）

初めての処女作品です。自分の好きな内容で、人と人の絆や交流をのんびり描いていければと思います。軽い読み物としてどうぞ。

大切な人（前書き）

現在軸から１０～６年ほど前のお話です。

大切な人

現在でこそ王の膝元と呼ばれる王都に、小さいながらも居心地の良い部屋に住んでいるフィリアスだが、十五の時まで生まれ育った村は隣国との国境にも近い場所に位置し、なおかつ”聖域の森”の近くでもある為に、やたらと神聖視する者が多い所為で旅人すらも中々近付かない貧乏村だ。

オマケと言っては何だが、フィリアスは孤児である。

生まれ育った孤児院の院長によると、まだ臍の緒すら付いたままの状態で”聖域の森”の中にある”精霊の泉”に捨て置かれていたらしい。

否、捨て置かれていた、というのは少々御幣があるかもしれない。

籐で作られた大きめのバスケットの中には、清潔な白いシーツで包まれてスヤスヤと眠るい赤子と、赤子へ向けた謝罪、そして血の滲むような苦悩、愛情が綴られた手紙が同封されていたというのだから。

村人以外には神聖視して王族か、それに連なる貴族くらいしか立ち入らない森で偶然通り掛かった村の狩人が見付けた時は大層仰天したそうだが、何より驚いたのはこの森に住む野生動物達が、草食肉食問わず皆一様に籠の中で眠る赤子を見守っていたから、だと聞いている。

通常そんな事はまず有り得ないし、異常であるのだがそこは”聖域の森”、きっと精霊や神々が憐れに思って守ってくれていたんじゃなかろうか、というのが村人全員の見解である。

そんな訳で、生まれた時からデンジャラスな出自の本人は、と言

えば、孤児だからと迫害する者のいない村人達全員から可愛がられてスクスクと育ち、自分を捨てた親に対しても何か深い理由があったのだろうとすんなり受け入れて、反抗期とは無縁の真っ直ぐで朗らかな性格に成長していた。

●●●●●

”聖域の森”の中、自分が捨てられていた”精霊の泉”と呼ばれる泉は透明度が非常に高く、
一番深いところでも十五ミルはありそうな底まで見通せる。
夏は冷たく、冬はほんのりと温かい不思議な泉は太陽や月の当たり具合でふんわりとした光を放ち、十歳になったフィリアスにとって自分が捨てられていた場所云々関係無くお気に入りの場所だ。
ただ、年齢が近く仲の良い村の子供達は大人達と一緒で”聖域の森”に足を踏み入れる事自体が畏怖のようで、此処に来る時は何時も一人なのが少々寂しいところではあるが。
曰く神話等とは関係無しに、森にはとても神聖な気配が満ちているから、という事らしいのだが、毎日のように森を駆け回っているフィリアスはそんな気配を感じた事はこれっぽっちもない。むしろ、”彼等”と会えるのが嬉しいと思う程度だ。

「……あれ？」

なのだが。
泉へ近付くにつれて、森が何だか騒がしい。
今日は風が強くもないので実際のところ、森は穏やかな日差しに

包まれているのだが、森の気配というか”彼等”が嬉しそうに騒いでいるのだ。
今迄偶々迷い込んだ旅人を出口へと案内している様子を見たりしてきたが、その時の嬉しさとは又違った感じを受けて、フィリアスは首を傾けつつも泉へと続く獣道を進んで行った。

●●●●●

背の高い木をすり抜け、フィリアスにとって楽園に等しい泉の入り口に足を踏み入れた途端に、フィリアスは唖然と口を開いた。

天使だ。絶対に天使だ。
天使じゃなかったら、神様に違いない。

空から差し込む陽光にキラキラと輝く金の髪はきっと触ったら細くて柔らかくて、自分の髪とは比べ物にならないくらいサラサラだというのが見て取れるし、金色の長い睫毛に縁取られた瞳は見た事も無い奇麗な青色。
フィリアスよりも年齢的には同じか、少し上くらいの少年。
線は細く、陶器のように白い肌と繊細な顔立ちに下手をすれば少女にも見られるのではなかろうか。
ちょっと物憂げに溜息を吐いている姿すらも、絵の中の出来事のようだ。
それに、何よりも”彼等”――森の精霊達がこぞって彼の周囲に集まっている様子からも、フィリアスの予想をより強固なものへと固めるのには十分なのだ。

滅多にお目にかかれない美人さんを見逃す手はない、と妙な貧乏心を発動させて凝視していたのが悪かったのか、ふと青色の瞳が此方へ向けられると、別段怪しい事をしていた訳でもないのに心臓が跳ねる。

だが、驚いたのは自分だけではなかったらしい。

丸々と見開かれた深い青色の瞳にこそ驚きこそすれ、何故自分を見て驚いているのか皆目検討がつかない。

色褪せた灰色の髪に、珍しいといっても薄桃色の瞳は貴色でも何でもないし、自分で言うのも悲しくなるが顔の造形は中の下、村にもちょっと出掛けた先の町にも自分より可愛い子は腐るほど居る。

何をどう切り出して、この人気の無い場所での挨拶を言うべきかと心の底から思い悩んでいたフィリアスは、躊躇いがちながらも空気を震わせた少年の高い声にハッと息を呑む。

「君は……なぜ、ここに」

しゃべった！天使か神様か知らないがとりあえずしゃべった！

天使や神様も、孤児の小娘にすら慈悲を垂れて話し掛けてくれるのか、ありがたや！

ちょっと興奮状態に陥って何も言わないフィリアスへもう一度少年が戸惑った声を掛けると、漸く自分に話し掛けられていると気付いたフィリアスは慌てながらも嬉しさに緩んだ笑顔を向けた。

「だってここは、私の庭みたいなものだもん」

「庭……？”聖域の森”だよね、ここ」

「うん、そうだけど？」

「……」

呆れたような、でも興味を持ったような、そんな瞳にフィリアスこそが首を傾げた。

●●●●●

「でもびっくりしちゃった。　この森は普通あんまり人が入らないから、私もあなたに会うなんて思ってなかったもん。最初は天使か神様かって思っちゃったの」
「僕は天使でも神様でもないよ。　本当はここまで来るつもりなかったんだけど、皆が騒ぐから…だけど、今は君に会えたから感謝してるんだ」

暖かな陽気に包まれた”聖域の森”の中。
初めて少年と出会った”精霊の泉”で午後からの時間を一緒に過ごす事が、フィリアスにとって此処数日の新しい日課となっていた。
透明な泉の水面にちゃぷん、ちゃぷんと裸足の足で悪戯に波紋を生み出しながら、隣に座る少年へちょっと照れたような笑顔を向けると、少年も青色の瞳を優しく細めて笑ってくれる。

「あー、確かにみんな騒いでたけど……あれってイクスにじゃないの？」
「違う。　フィリの存在を皆が僕に教えたんだ」
「私？へー、そうなんだー……だからあの時すぐに見付かったのね」

失敗したー、と空を見上げる一歳年下のフィリアスに向けられた青色の瞳はどこまでも優しい。
フィリアスは精霊達の姿が見え、意思を交わす事ができる。
本来、その力は太古の昔人が誰しも持っていた力だという。

しかし、精霊や神々からの贈り物である魔力(マナ)を自分達の力だと次第に驕り始めた代償なのか罰なのかは分からないが、今では精霊達を見る事が出来るのは王国の王族に連なる者と、魔導師(ウィザード)の中でも最高位に位置する者達だけだと言われている。

辺境の村で生活しているフィリアスがそんな事を知っている筈も無く、どうも精霊達が見えているらしき動作を取る姿に少年から聞かされた時は余りの違和感を覚えた程だ。

確かに、村の皆には精霊達が見える事を言った事はない。

だがそれは別段言う必要と、機会がなかっただけであり、フィリアス本人にとって”見える”事は至極当然であったのだ。

もう十年も生きていて今更に”見える”事の尊さを言われても、首を傾げるしか方法が無いのは些か仕方の無い事だろうか。

とはいっても、イクスも精霊達が見えているので尊いだとか、凄い事だとか言われてもいまいちピンとこない。

最初こそからかっているのかと思っていたが、物凄い躊躇いを挟んだ後にイクスから言われた言葉で漸く納得するに至った。

イクスの本名は、イクトゥース・シェル・ラティリカ

フィリアスが暮らすラティリカ王国の第二王子であり、現在は年に一度”聖域の森”にて行われる行事に参加する為王都からやって来た、というのだ。

金の髪も、青の中に星が瞬くような不思議な色の瞳も生まれてから一度もフィリアスは見た事が無かったが、成程王族だけが持つ”貴色”ならそれも納得だ。

とても強い魔力(マナ)を持つという王族の中でも、極少数しか精霊を見る事はできない。だから、イクスには精霊達が見えていて、何でも

無い事のように過ごしているフィリアスに驚いた。
しかも、稀有な力と自分の地位を明かしても「へー、そうなんだー！」と驚きはしても、自分を驕ったりだとか変にへりくだったりとか、緊張その他諸々を全く見せずに、寧ろイクトゥースは呼び難いからと愛称まで付けられてしまった。

共通の”秘密”を持つ友人。
王族として、稀有な人として、そんな壊れ物を扱うような周囲の扱いと、権力に餓えた者達の視線に幼い頃から晒され続けているイクトゥースにとって、少女の反応は新鮮で、とても眩しい。
だからこそ数日後に儀式が終わり、王都へ帰る事になった旨を伝えた際、折角仲良くなれたのにと薄桃色の瞳にいっぱいの涙を湛える少女へ極一部の親しい者にしか教えない、イクトゥースと直接連絡を遣り取りする事の出来る方法を教え、また来年訪れる約束をしたのだ。

だが、それも長くは続かない。

十六の成人の儀を一年後に控え、今迄のように地方の儀式やパーティに出席する事をイクトゥースは禁じられた。成人する王族として、何時までも”遊び”に興じてはならぬという王自らの判断であった為、イクトゥースも反発する事が出来ずに項垂れるしかなかった。

「それなら、今度は私がイクスに会いに行くよ」
「……え？」
「だって、いままでイクスは森に来てくれてたでしょ？それで、来れなくなるんだよね」

「うん。　来年成人を迎えるから、王都で勉学に励むようにって…」
「だから私が今度はイクスに会いに行くの。　うーん、でもイクスって王子様だから、会わせてくださいって言っても無理だよねー」
「フィリ？」
「あ、そうだ。　私、院長先生から聞いた事があるんだけど、お城は沢山の人が働いてるよね」

”聖域の森”で会うのは恐らく最後になる日。
苦しい心地の侭で告げたイクトゥースに返ってきた言葉は、何ともあっけらかんとしたものだった。
なにやら真剣に王都まで来ようと考えているらしき横顔を唖然とした青色の瞳が見詰める間にも、フィリアスは”作戦”を確立すべく顎に人差し指を軽く添えて、ちょっと気取ったように眉を寄せる。
「魔導師（ウィザード）は王国でも尊重される存在で、上位魔導師（ハイウィザード）は宮廷魔導師として、王族を守る光栄な地位に就く」

孤児院の院長が言った言葉をそのまま真似ているらしいが、得意気にフィリアスは続ける。

「フィリ、でもそれは」
「私、魔法以外で役に立てる事なんて何もないから…どれくらいかかるのかは分からないけど、なってみせるよ。　上位魔導師（ハイウィザード）に」

躊躇いを滲ませるイクトゥースとは裏腹に、フィリアスは少しだけ照れくさそうに、そしてちょっとだけ不安を滲ませてイクトゥースへ薄桃色の瞳を向けた。

「必ず会いに行くから。だから、イクス……まっててて、くれる？」
「……勿論。　それじゃあ僕は、フィリが来てくれた時に失望され

ないように、する」

イクトゥースは強く頷く。

フィリアスと過ごした日々は一年でもたった数日間のみだが、手紙の遣り取りや一年に数日間の邂逅でも直ぐに知れる、少女の誰にも縛られない心は愛おしい。

そう、愛おしい。

何事にも一生懸命で、笑顔を絶やさず、精霊達を心から好いている少女が。

今も自分の言葉一つで、とても嬉しそうに表情を綻ばせる小さな存在を思わず抱き締めながら、イクトゥースは目を白黒させているフィリアスにも聞こえないように、囁いた。

「いつか、僕が君を迎えにいくよ」

大切な人（後書き）

1ミル＝1m

書き始めたばかりですので、ご意見ご感想、アドバイス全てが大切な原動力です！何かあれば是非ともご一報ください。

市場

「フィリ」

五年目の学院試験に見事落ちた次の日の晴れた朝。
ほぼ丸一日暴飲暴食を繰り返し、美味しいスイーツと優しい同僚達に癒されて新たな気持ちでスッキリと下宿先から出てきた店で準備をしていると声が掛かった。
フィリアスは露骨に嫌な顔をすると、その声を無視する。人手が足りなかったり、朝の仕込みを行う時は菓子職人達と共に準備を行ったりもするが、基本的にホール担当である為店から支給されている制服も白いフリルブラウスと短めのスカート、店のロゴが縫い付けられたエプロンである。
エプロンの紐を解けないようしっかりと結びながら、聞こえないフリを貫こうとしていたフィリアスの目論見はもう一度自分の名前が呼ばれた事で失敗に終わり、不承不承、渋々と背後を振り返る。
この猫撫で声で呼ばれる時は、大概ロクな事がないのだ。

「フィリ、済まないがこれから市場（マーケット）で果物と砂糖を仕入れてきてくれないか」
「え、でも私……」
「昨日で材料が切れてしまってねえ……ああ、困ったなあーー？」
「……喜んで行かせてください」

昨日の今日なのだから、裏方仕事が全部私に来ても良いから泣き腫らしたこの顔を晒す事だけは免じてくれないのだろうか、この鬼畜男！

思わずフィリアスは心の中で目の前の男に毒づいたが、何せ原因は昨日店の商品を片っ端から暴飲暴食した自分自身なのだ。ひくつく目元をなんとか押さえつつ愛想良く頷くと、リストと皮袋に入った硬貨を受け取り視線から逃げるようにして店から通りへと出た。

そこそこ裕福な層の若い女性や、甘い物に目が無い女性を狙った洋菓子店は結構に立地が良い場所に建てられている。お得意様が増えるように、と住宅街からも近く、裏道を使えば何時でも新鮮な食材が並ぶ市場へも近い。

フィリアスが何時も通る裏道は、特に人様の家の塀だったり屋根だったりもするので余計に早く市場に辿り着けるしその分今は自分の酷い顔を見られずに済むので有り難い。

磁器人形（ビスクドール）のように奇麗な顔だったり、サラサラの金髪だとかしたら泣き顔もちょっとは見れるかもしれないが、何せ曖昧な髪に瞳の色に、中の下な感じが否めない残念な顔の作りである。

まあ別段と顔の作りが少々悪いと言っても、悲観する程繊細な心の持ち主では無いので問題は無いのだが、そこは矢張り女性として腫れた目を周囲に晒してからかわ…心配されるのが心苦しい訳で。決してからかわれるのが嫌な訳では無い、決して。

自分の中にあるちっぽけな少女心を前面に押し出して都合良く不貞腐れながら、塀と塀の合間を縫って市場の一角へと滑り込んだフィリアスは、何時も買出しを行っている露店へと近付いて行った。

●●●●●

「おはよう、フィリ！昨日は”また”駄目だったらしいなあ。　ま

あ落ち込むなさ、また来年があるよ！」

季節の果物を扱っているこの店の主は、フィリアスの姿を見付けると恰幅の良い体格に見合った丸々とした顔を綻ばせて、先日店の同僚からも言われた言葉を朗らか且つ高らかに、そして自信たっぷりに励ました。

貶されているのか励まされているのか正直分からない。

「おはようございます、ジールさん。　またって言わないでください……私のやる気度が絶賛下降中ですよ……」

「おや、それは済まなかったねえ。　それじゃあ、今日は傷心しているフィリの為に、ウチの商品二割引でどうだい？」

「え、ほんと？　ジールさん大好き！」

預かって来たのは自分の所持金では無く、店の金銭ではあるのだが、それはそれ。

安くして貰えるのならやってもらわない手は無い。

時に乙女はちゃっかり堅実に時代を生きる事も大切なのだ。

落ち込み気味且つ、少し腫れた目をしていたフィリアスはその一言で忽ち機嫌を回復させると、メモを取り出して色とりどりに並ぶ果物達を指差しては必要な数を伝えてゆく。

「まだ市場に居るんだろう？　なら、サービスでコレも掛けておこうかね」

『セ・リデュース・エウリア』

そう言って、ジールと呼ばれている店主がフィリの購入した果物

の入った籠へ軽く手を翳して呪文(スペル)を唱えると、淡く手が発光してすぐに納まった。

「これでよし、と。　何時間かは痛みが止まるから、ゆっくり買い物して店に戻んな」

「わー、やった！　いつも有難うございます！」

数時間の間に渡って物質の腐敗を停止させる効果は、元々腐敗を進行させる魔法と一定の対象を停止ささせる魔法の呪文(スペル)を組み合わせていて、店主の独創(オリジナル)魔法だ。

だが、その効果は侮ることなかれ。

冬でも熱気に溢れた市場である。春の朝とはいっても次第に暖かさの増し始めた市場で買出し等続けていたら、すぐに新鮮な果物は傷みが始まってしまう。

そんな時ジールの魔法はとても有難いし、何より彼の唱える呪文(スペル)には精霊達への”命令”が感じられないから好ましい。

願ってもないプレゼントにフィリアスは弾んだ声を上げ、ついでにジールへ愛の言葉も言ってはみたが、これは「冗談は顔だけに……」と笑われてしまった。

華の乙女に良い度胸だ。今すぐ正座させて懇々と説教しようかとも思ったが、悪気がある訳では無いと長年の付き合いで分かっている為、フィリアスは寛容な心で聞かなかった事にして、果物の入った重い籠を抱え店先から市場の通へと出た。

そもそも、魔力(マナ)は太古にか弱い存在だった人間へ神々と精霊達が施した祝福である。

人間はその恩恵に感謝し、祈りや願いを捧げる事で魔力を魔法へと昇華させた。

だが、何時の頃からか人間達は魔力(マナ)を自分達が得た力だから、と驕り始め、自分達と異なる存在を見る事を止めた挙句、祈りや願いとは異なる強制力を持った呪文(スペル)で魔法を使用するようになった。
暗い夜道を照らす街灯の明かりも、暖炉へ火を灯す時の火種も、傷を癒す治癒も。
全ては人間を愛してくれる存在の祝福を得ての”奇跡”だというのに、人間は敬う事を止めてしまったのだ。
あまつさえ、その”奇跡”は使えて当然であり、当たり前だと思っている。

だから、フィリアスは呪文(スペル)を唱えられない。

物心付いた時から人では無い存在を世界に感じているフィリアスにとって、魔法は彼等に”命令”をして得るものではないからだ。
精霊、と一つに言っても、形は様々。
力の弱いものは淡く輝く光の粒子に、多少力のあるものは掌程の透明な羽を持った妖精(フェアリー)や或いは蝶のような形であったりと形は複数あるが、共通しているのは淡い輝きを持っている事と、フィリアスやイクトゥースなどの極少数にしか見えていない事である。
当たり前だと思っているから、皆は気付かない。
人間に手を差し伸べる存在が居てからこその、尊い”奇跡”なのだと。

せめて、呪文(スペル)無しで生み出すものを認めてもらえたら。

そうは思っても、過去の五度に渡る試験で一度も免除された事は無い為、今後も無い気はひしひしと沸いてくる。
来年挑戦して、それでも又駄目だったら精霊達に謝って試験の時

だけ呪文(スペル)を使おうか。いやいや、やっぱり命令するのは気が引けるし、何より自分は唱えようとすると喉がつっかえて上手くいかないではないか。

嗚呼、六回目確定かもしれない。

流石にもう待って貰えないかも。

籠の中に持つ果物は艶々としていて、今にも食べて下さいとばかりに輝いているのに、それを持つ人物は何処か違うところへと意識を飛ばして引き攣り笑いすら浮かべている。

市場を行き交う人々は見てはいけないものを見てしまった、と記憶から抹消している事に当の本人は気付かない侭、次の材料を仕入れる為に人の波を進んでいたフィリアスは、ふと人と人が作る壁の向こうから市場の活気とは又違う喧騒が漂ってくる事に瞳を瞬かせた。

『――――』

「…！……――」

喧嘩だろうか？

人間の言葉を操れない小さな精霊達のざわめきに混ざって、複数の声が響いてくる。

こんな人通りの多い場所で喧嘩をするなんて、他の人や精霊達にも迷惑だ。

皆の視線が人垣の向こうに注がれているのを良い事に、フィリアスは一人憤ったが、次に仕入れる予定の砂糖はこの人垣の向こうに出ている露店で購入している為行かぬ訳にはいかない。

自分自身が（あまり良い意味ではないが）有名人な為、あらぬ火

の粉を受けてこれ以上情け無い思いはしたくない。
出来るだけ離れて、通行人その一として通ってしまえば良いだろう、と果物を潰されないようにとだけ気を付けながら、フィリアスは止まっていた歩みを前へ進め始めた。

それが間違いだったのかもしれない。

市場（後書き）

漸く魔法らしきものと、主人公が呪文を使えない理由が出てきました…！理由はちょっとこじつけっぽい感じもしますが、ご、ご都合主義という事で…。

不具の娘（1）

新鮮な食材や、地方では見かけない上質な布地も勿論だが、王の膝元とも呼ばれる王都の市場（マーケット）には魔法に使用する小道具や、精霊の力を宿した宝石等も売られている。

そんな小道具を扱う露店の前で、購入する気配も無いというのに騒いでいるのは若い青年四人。

彼等の出で立ちを人垣の合間から覗いたフィリアスは、思わず渋面を作った。

四人が身に纏う黒に近い濃藍の上質な長衣（ローブ）には、金銀の刺繍で細かな装飾が全体に施されていて、非常に美しい。その左胸部分に輝く、大粒の宝珠で作られたブローチは細工も勿論だが光の加減で発光しているようにも見え、見る者をハッとさせる。

特に、四人の中でも中心人物らしい、フィリアスと同年齢程に感じられる銀髪の青年が見に付けているブローチの色は、海の水とも湛えられる美しい薄青色をした藍玉（アクアマリン）。他の者も、宝珠の色は異なるが、皆一様に一定以上の魔力（マナ）を有しているようだ。

間違いない、”王立魔導学院”に所属している魔導師（ウィザード）、それもかなり魔力の高い魔導師である。

「お前……この、粗悪品……」

「売り…だと……笑わせる……」

距離がある為、一言一句聞き漏らさない事は出来ない。

ただ、漏れ聞こえる会話から、どうやら店の店主へ絡んでいるよ

うだ。背の高い魔導師が王都の市場でこのような粗悪品を、と周囲に集まる皆にも聞こえるように仰々しく声を張り上げているので、最前からこの光景を眺めている者には煩い程に聞こえているだろう。
また、冷や汗を流しながら謝罪している店主へ向けられた八対の瞳には、自分への高い誇りと、過度な自信が満ち溢れて傲慢すら感じられる。

居るのだ。人より魔力が高く、学院に入れたからと途端に自信過剰になる者達が。

勿論、礼節と儀礼を重んじた魔導師達の方が圧倒的に多い。それでも、白に黒が一滴落ちると目立つように、礼儀に欠けた存在がどうしても目立ってしまうのは些か仕方の無い事だ。王都での彼等の存在は、出来るだけ関わり合いになりたくない人種であった。
その為か、四人の魔道師と店主を囲う人垣は、この状況を不憫にこそ思っても店主を助けようとする者は一人としていない。
逆らったら――何をされるか分からない。
そんな仄かな恐怖に身体を捕らえられ、動けない。動かない。

「フィリちゃん……やめておきなよ」

だが、残念ながらフィリアスは謂れのない事を上から目線で言われて我慢が出来る性格ではない。それが、自分に対するものでなくとも、市場（マーケット）の皆は顔馴染みなのだ。
誰も行かぬなら、乙女の平手で目を覚ましてやろう。
つい先程まで見て見ぬフリをし、自分に被害が来ないうちに離脱しようと思っていた事など遠い彼方へと忘却したフィリアスは、しかしながら隣から掛けられた声に人垣の前へ進めようとしていた足

を止めて隣を見た。

「おばさん……。　でも、元々お守りくらいの魔導具（マジックツール）を置いているお店なのに、あんな言いがかり……！」

「フィリちゃんの気持ちは分かるけどねえ……」

恰幅の良い中年の女性は、フィリアスが良く利用しているパン屋の女将だ。

今にも前へ突進しそうなフィリアスのスカートを軽く摘んで止めると、普段なら皆がほっと安心するような笑顔ではなく、何処か困ったような弱い笑顔で首を軽く振った。

「やっぱり駄目だよ。　フィリちゃんは良い子だけど、怪我させたくないし」

「おばさん……」

よっぽど女将を呼んだ声が情けなかったのか、おばさん、と呼ばれた女将は何時もの生気に満ち溢れた笑顔を満面に浮かべた。その侭、ぽんぽんとフィリアスの頭を軽く叩く。

「店のダンナも分かっているさね。　何、もう暫く我慢するだけだよ……フィリちゃんがそう思ってくれているだけで、あたしたちゃ嬉しいんだから」

「……ごめんなさい…」

「謝る必要が何処にあるんだい！買出しの途中だったんだろう？早く終わらせといで」

未だに店主へ文句を挙げ連ねている魔導師達が気になって、中々動こうとしないフィリアスの背を女将は人垣から押し出す形で押すと、「後は任せな」とばかりに片目を瞑って見せた。

その明るい表情に、漸くフィリアスも小さく笑顔を見せると軽く頷いた。

●●●●●

去年の夏、フィリアスは怪我を負った。
丁度今と一緒で、最早其処等のごろつきと変わらぬ程の傲岸不遜な態度を貫いた挙句、ぶつかったから、という理由だけで幼い子供に手を上げた魔導師に楯突いた為だ。
激昂した魔導師は、あろうことか大通りの往来で電撃系の攻撃魔法を無差別に放った。捨て身でフィリアスが魔法を避ける事無く突進し、魔導師を取り押さえていなければ、被害は周囲に居た見物人や建築物にまで及んでいただろう。
しかし、その代償は大きい。直接魔導師に触れた右腕と右手は、電撃で身体の皮膚や細胞を切り裂かれ、暫くの間動かせなかった。
多少は不便な時期もあったが、行った行為自体にフィリアスとしては全く後悔は無かった。ただ、その事を知っている女将の脳裏に、去年の夏と同じ景色が広がったのかもしれない。

後悔は無くても、皆に迷惑を掛けたのは事実であり、真実。
嫌だ嫌だと駄々を捏ねる程に幼くは無く、それでもやっぱり胸の奥に蟠る（わだかまる）感情が拭われる慰めにはならない。
四人組の顔はしっかりと覚えている。後からこっそり呪詛でも掛けてやろう。
自己満足（エゴ）此処に極まれりだが、フィリアスは一先ず溜飲を下すと果物が入った籠を両手に持ち直して歩き出した。

『エル・リヴェ・ハーヴォ』

――ぱんっ、ぱん！

背の高い魔導師が紡いだ呪文（スペル）は、忽ち対象に向けて発動された。水の入った風船が割れたような、水分を含むものが破裂する音が辺り一帯に響き渡ると、ざわめきに満ちていた往来は一瞬にして水を打ったような静けさに包まれる。

一体何を、と皆々の瞳は恐々とした色を湛え、自分や隣の者が被害にあってはいないかそれぞれに視線を巡らせるが、誰も何ともない。

では、一体……？

そう思った皆が、呪文を唱えた魔導師へと視線を移動させる。そして、冷笑を湛えた魔導師の視線の先に映る人物の姿を漸く確認すると、一様に息を呑んだ。

「見ろよ。　あそこに不具の娘が居るぜ」

軽蔑したような声が響く。

呪文は、対象物を内側から破裂させる魔法。

魔導師はフィリアスの持っていた籠の中の果物を、魔法で破裂させたのだ。

あ、ちょっと泣きたい。
果物が破裂した衝撃で、果物の果汁塗れになったフィリアスは、少しだけ心の中で泣き言を零した。

不具の娘（1）（後書き）

※藍石（アクアマリン）

主な宝石言葉は沈着、勇敢、聡明。ラテン語で”海の水”と呼ばれ非常に美しい、澄んだ水色をしている。航海・海難防止の守護石でもあり、古くから船旅や海で働く人々のお守りにされています。

不具の娘（2）（前書き）

全体的に差別的用語が使用されています。ご注意を。

不具の娘（2）

不具……不具！？

何という差別用語を公共の面前で使うのだ！

フィリアスを見る周囲の者達が、その一言でさっと表情を変えた。

落ちこぼれとは散々言われてきたが、不具と呼ばれたのは流石に初めてだ。

……などと悠長に考えている場合では無い。魔導師（ウィザード）達に見付からないうちに、とパン屋の女将は気を利かせてくれたが、どうやらしっかりばっちりと見付かっていたらしい。

望む、望まざるに関わらず、厄災は何時も唐突に足許から浚って来る。

「お前、フィリアス・アイシェールだな？」

今し方フィリアスへ魔法を使用した背の高い魔導師が、新しい玩具（オモチャ）を見つけた、子供のような嬉々とした声で名を呼ぶ。

サッ、と人の波が引潮のように引いて、魔導師達四人とフィリアスの間を隔てるものは何も無くなった。残ったのは、身なりの良い魔導師と、弾けた果物の果汁で顔は勿論の事、白いブラウスや髪まで満遍なく汚れた（果物だから香りは良いのだが）フィリアスだけ。

「……確かに私ですけど。　だからといって、何だと」

「ははっ、これはいい！　”何だと”　だってさ！」

何がそんなに可笑しいのか。大袈裟な程に魔導師が両手を左右へ

大きく広げ、フィリアスの言葉を反芻すると残りの三人も一様に薄笑いを浮かべて嘲笑にも似た色を乗せた。

「普通、一回落ちたら二度は受ける者がいない、”王立魔導学院”に五度も受験した挙句、結局一度も受かった試しが無い、落ちこぼれのフィリアス・アイシェール！」

顔の筋肉が引き攣るのだけは何とか堪えたが、内心でこの魔導師へ既に数十回は飛び蹴りを行っている。

確かに、魔導師が言っている事は嘘偽り無くフィリアスの事ではあるのだが。だから何だというのだ。大体、一回しか受けられない、何て受験基準はそもそも無いのだから、何度受けたって自由ではないか！

内心の憤りを隠すように、フィリアスは息を深く吐いた。

何度も試験に挑んでいると、どうしてもこういった類の人種が前へ立ち塞がってくる。

自分達が正しい。

自分達は正義だ。

自分達こそ敬われる存在だ。

フィリアスからしてみれば、呪文（スペル）を声高らかに使用している時点で、笑止千万だというのに。精霊達を見ようとも意識しない時点で、論外だというのに。

しかしながら、思った事をその侭口に出してみた後の結末は、悲惨な状況が広がりそうだ、という事くらいは流石のフィリアスでも分かる。その為、毎度フィリアスはちょっと困ったような笑みで話を聞き流…もとい、話を聞いて切り抜けている。

馬鹿馬鹿しい。一度で合格したか知らないが、人間として最低限の礼節（マナー）くらいお前様達はまず持ち合わせたらどうなのだ。

顔の表情には全く出さずにフィリアスは毒付くと、折角安価で仕入れた果物の恨みも見事に押し隠して、曖昧に笑ってみせた。我慢である。

食って掛かった挙句、フィリアスだけでなく周囲に被害が及ぶのは望まない。

「御力の強い皆様に比べれば、不具と言われても仕方が無いのかもしれませんが……それでも、何故このような行いを受けねばならないのでしょうか？」

少し改めた口調で、決して内心の沸き立つ怒りを表さないようにしながらも、フィリアスは役者では無い為、どうしても慇懃無礼な響きを滲ませてしまう。

それが面白いのだろう。全くもって人の悪い薄笑いを魔導師は浮かべると、まるで小さな子供に言い聞かせるような口振りでいけしゃあしゃあとした声を掛けた。

「ハッ、果物には栄養が豊富だろう？直接被ったら、少しはその頭も良くなるかと思ってね。　慈悲だよ、慈悲、優しいだろ？」

「なっ……」

「おいおい、バッシェ。　あんまり本当の事を言うなよ、可哀相だろ」

「違いない！」

どっ、と笑い始める四人を尻目に、フィリアスは思わず絶句し、瞳を見開いた。

こうなると、最早彼等が行っている事は唯の私刑（リンチ）に他ならない。

つまるところ、魔導具（マジックツール）を扱う店の店主から、矛先が自分へと明確に変更されたらしい。より、面白く。より、陥れがいのある玩具に。

「……その格好は、余りに憐れだな」

四人の中で纏め役らしい、銀髪の青年が笑いを納めると、すっと片手を身体の前へと差し伸べた。バッシュ、と呼ばれた魔導師を含め、残りの三人も青年の意図するところを察しているらしい。

止めるでも無く、寧ろこれから起こる”面白い事”を心待ちにしている心情が、ありありと透けて見える。

『エン・フェンディア・ウォーティ』

流水を思わせる優雅な所作からして、どこか上流階級の子息だろうか。

動きは酷く完成されていて、息を呑み見守る皆々も思わずと感嘆の息を吐いた。

だが。

フィリアスには”見えて”いた。

飛魚のような姿で空気の中を水中のように自在に泳ぎながらも、悲し気に揺れる、水の精霊達が。

大気が揺らぎ、青年の差し伸べる掌へ次第に水が集まり始めた。
軈てその水分は見る見るうちにフィリアスの頭一つ分程の大きさの水球へと体積を増してゆく。

『クウェイ・ティース』

嗚呼、昨日に引き続き何てついていないのだろう。
せめて一週間くらいは放って置いて欲しい。大体、憐れも何もフィリアスの果物を断り無く破裂させたのは其方ではないか！
あんまりな仕打ちに、思わず視界がぼやりと揺らぎ始めるが、泣き顔を晒したところで彼等を喜ばせるだけだというのは嫌でも分かる為、フィリアスは唇を噛み締めて青年を睨め付けた。最早意地である。
絶対に、泣いてなど、やるものか。

青年の掌から、呪文（スペル）に従い一瞬でフィリアスの頭上へと転移した水球は、保っていた形を崩して重力に従い落下し――真下に居た、フィリアスへと降り注いだ。

「ほら、奇麗になっただろう？嗚呼、今度は水に濡れたが、些細な事だ。　どうせ、濡れていようが乾いていようが、不具の娘に変わりは無い」

凍りついたように表情を強張らせる周囲とは逆に、どっ、と四人は嘲笑を上げた。

まともに水を被ったフィリアスは、髪から衣服から、下着に至るまで全身濡れ鼠になっていた。ぺったりと張り付く灰色のくすんだ髪の隙間に、薄桃色の瞳が静かな怒りを湛えて揺らいでいる。

心の奥底が次第に冷えてゆく。

冷たい感情がふつふつと身体の奥から湧き上がってくる不快な感覚の侭に怒声を発してしまいそうになる自分を必死に抑えながら、籠を抱える腕にギシリと力を込めた。

決して、自身に対する扱いに怒っているのではない。こんな者達が精霊達を良いように呪文(スペル)で縛り、使っている事が何よりもフィリアスを苛立だせた。

心の広い、優しい乙女も我慢の限界である。

その奇麗な横顔を一度張り倒して、正座させてから小一時間程説教してやろう。一緒に魔導具(マジックツール)を扱っている店主にも謝らせよう、そうしよう。

『……リア・フォーリィ』

今正に魔導師と距離を狭めようとしていたフィリアスを、春の穏やかな風に似た空気がやんわりと包み込み、濡れた髪や衣服から水分を奪い去ってゆく。吹き抜ける風に混ざって、背に半透明の双羽を生やした妖精(フェアリー)が微笑みながら消える様を、半ば唖然としてフィリアスは見送った。

魔導師達が衣服を乾かしてくれた訳ではない事くらい、呆気に取られた表情から容易に汲み取れる。見守っていた見物人達もそれは一緒だ。

「彼女は私の友人なんだ。　苛めるのはやめてくれないかな？でないと、君達の師匠に私は報告しなくてはならないよ」

優しい風に似た、穏やかな声が聞こえた。

不具の娘（3）

まるで守るように。
一人の体躯が、四人の魔導師とフィリアスとを隔てる形で人垣から滑り出てきた。

首の後ろで一纏めにして背の真ん中あたりまで伸ばしている髪は、水に青を少しだけ溶かしたような、淡い水色。陽光が輝いて宛ら水銀の輝きを思わせるが、何よりも目立つのは生き生きとした若葉を思わせる切れ長の瞳では無かろうか。
金銀の刺繍が煌く上質な長衣（ローブ）。左胸部分に輝く宝珠のブローチは、深く穏やかな緑を湛えた水草瑪瑙（モスアゲート）。”王立魔導学院”の輝ける魔導師（ウィザード）の青年。
見知った背中へ、フィリアスは驚きと微かな喜びを込めて愛称を呼んだ。

「ヴィル」
ヴィーツェルア・フレイ。

”王立魔導学院”にこの人あり、とも言わしめる学院の星。
風を司る精霊の血筋が彼の家系には流れているとすら囁かれ、強い魔力（マナ）の中でも風魔法に於いては上位魔導師（ハイウィザード）をすら唸らせるという。
優しげな面立ちに、スラリとした体躯。一本芯が通った凛々しい顔付きと容姿も、世の女性が放って置かない造形だ。
天は人に二物を与えず、という例えは何かの文献で見た記憶があ

るが、彼に関してはきっと二物どころか三物、四物も与えているに違いない。時折理不尽だ、とも思うのだが、如何せんヴィーツェルアは性格も大変宜しい為、怒るに怒れず毎度フィリアスは不完全燃焼気味である。

「な……！？ヴィーツェルア・フレイ！？」

「何故…何故、”風の詠み手”が不具の娘を庇う？」

風の詠み手。彼の二つ名。

通常、二つ名は上位魔導師（ハイウィザード）以上の者に与えられる栄誉な称号だが、ヴィーツェルアは確か二年程前に王都で発生した、凶悪殺人事件の犯人逮捕に貢献し実績が認められて、二つ名を”魔導師協会”から特例授与された。

魔力（マナ）を強く持つ瞳の色で元々周囲から注目されていたが、件の事件以降には学院以外の者達にも知れるところとなり、今や絶賛時の人なのだ。

学院内でも男女と問わず羨望の的である存在が、五年経っても学院に入学すらできない娘を庇っている。ヴィーツェルアの名を知らぬ筈のない、学院所属の魔導師達が驚愕するのも無理からぬ事か。

「言っただろう？フィリアス君は私の友人なんだ。　誰だって、自分の友人がこんな仕打ちを受けていたら、妨害してやりたくなるものだよね」

未だに驚きが抜け切れていない魔導師四人を尻目に、ヴィーツェルアは何処までものんびりとした口調を崩さず「ねえ？」と、背中に庇うフィリアスへ首を巡らせて問い掛けた。

若草色の瞳とまともにぶつかった薄桃色の瞳には、しかしながら先程までの嬉し気な表情から一変して、ちょっとした恐怖が浮かん

でいた。

怒っている。見ただけでは分からないだろうが、滅茶苦茶に怒っている。

四人に対して怒るなら分かるが、被害者の私が何故どうしてこんな目をされなければいけないのだ！

思わず、「ヴィルさんや、怖いです」と意味を込めて恐々と見返してはみたが、喉で小さく笑われて、視線がフイッとフィリアスから四人の魔導師達へと移る。

友人と言っておきながら、む、無視……！

「それに、”不具”とは聞き捨てならないね。　彼女は君達より、余程優れた人だ」

いえあの、ヴィル。庇ってくれるのは、とっても嬉しいけれども。公衆の面前で、そんなサラリと恥ずかしい事を言うのは止めて貰えないでしょうか！フィリアスは心の中で声を大にして叫んだが、実際に言った未来は想像が付く為口を噤む。

乙女には寡黙さも必要である。

「なっ……俺達より優れているだと！？」

「……バッシェ、行くぞ」

「ジェイ、だが！」

最初果物を破裂させた、バッシェと呼ばれる長身の魔導師が忽ち気色ばむ。

屈辱を与えられたと思ったのか、顔を赤くして食って掛かろうと

した彼を制したのは、意外な事にフィリアスへ水を掛けた纏め役らしき銀髪の青年だった。
不具だ不具だと卑下してきた人間よりも、自分達が下だと言外に言われているに等しいのだ。矢張り不快感を如実に映した表情ではあるが、反抗したところで分が悪い事くらいは分かるらしい。
尚も言い募ろうとするバッシェ（愛称か本名かは知らないが）を睥睨すると、たじろぐ三人を残して長衣（ローブ）を翻し、戸惑いながら道を開ける見物人達の間をすり抜けて行く。
慌てて銀髪の魔導師を追い掛ける三人だが、最後に此方へ向けられたバッシェからの憎悪に似た視線に、フィリアスは背が寒くなる感覚を覚えた。

嫌な予感がひしひしとする。
この手の嫌がらせは過去何度もフィリアスは経験しているせいか、こういった事に関する危機感知能力だけは野生動物並みに鋭いのだ。特に目立つ事も望まないし、学院へ入学して上位魔導師（ハイウィザード）になることだけが夢だというのに、どうしてこうも面倒事があちらからやってくるのだろうか。
ああ、もう嫌だ、今すぐ帰って寝たい。半ば現実逃避に走り、項垂れていたフィリアスの意識を現実に引き戻したのは、穏やかな男性の声（に、周囲の皆は聞こえるであろう）だった。

「平気かい？フィリアス君。　怪我はしていないかな」
「へっ、へへへへへいきです！そりゃもうバッチリばっちし私は元気です！」

面倒な人種をものの数分で追い払った”英雄”に、固唾を呑んで事の成り行きを見守っていた周囲から絶賛を浴びている青年の、目下興味の的はどうやっても外れてくれはしないらしい。
十人中十人が眉を顰めるような挙動不審たっぷりの言動をフィリ

アスが口にしても、ニコリと笑みを浮かべて見せるあたり、かなりの大物である。しかしながら、それを直接見せられたフィリアスはひい、と喉を声にならない悲鳴で震わせた。

「それは良かった。　嗚呼、でもやっぱり心配だな……おいでフィリアス君、詳しく話を聞こう」

「えええええ！？わっ、私これからまだ仕事が……！」

「その格好で？」

「う」

確かに、ヴィーツェルアの魔法で下着までびしょ濡れだったフィリアスの服は、すっかりと乾いているし、果物の香りもして何だか気持ちまで軽い。

ただ、清潔感ある白だったブラウスは無残な斑色に染まっていたし、このままでは店に戻っても仕事が出来ない事は明白だった。

「乾きはしたけれど、その格好で？」

「うう……」

「精神的にも疲れただろう？私が店主（オーナー）に事情を話して、今日は休めるように掛け合うよ」

「……ハイ……」

皆からすれば、友人思いな魔導師からの誘いを何故ここまで渋るのか不思議に違いない。

知らぬが仏とは正にこの事だ。

これから暫くの間、わが身に降りかかる”不幸”を容易に脳内再生したフィリアスは、絶望的な気分を押し隠せない侭蚊の鳴く声で返事をした。というか、ハイかイエスで応えなければ、何が待っているか分かったものではない。つまり選択の余地は無いのだ。

嗚呼、今日は本当についていない。

ええい、どうにでもなれ！

半ばやけくそ気味にフィリアスは石畳を蹴ると、ヴィーツェルアの背を追って小走りに進み出した。

不具の娘（3）（後書き）

※水草瑪瑙（モスアゲート）

この石を持つ人に、自然の恵みと繁栄をもたらしてくれるといわれています。宝石言葉は、友愛、親子愛、家族愛、自然愛。　持ち主だけでなく、周囲にも癒しを齎し、対人関係を安定させる働きがあるそうです。

躊躇い

「……聞いているのかな？」

あれから一時間も経たない後、丁度小腹が空いてくる時間。
偉大なる友人殿から浚われ…もとい、”お誘い”を受けたフィリアスは、勤務先の店主（オーナー）に事情を説明して早退し、汚れた制服は私服に着替えた。
二人の行き着けであるカフェの窓際はフィリアスの特等席だ。窓から差し込む心地良い陽光と優しい色調で整えられた店内は、訪れた客を穏やかにもてなしている。
フィリアスの座る前で香ばしい湯気を立ち上らせる珈琲も、甘い香りで誘惑する桃のタルトも大好物なのだが。
どうしよう、この状況。一難去ってまた一難。
フィリアスはのっぴきならない状況に追いやられていた。

「え！はい、そりゃもう耳の穴が空く程にヴィルさんのお話をですね……！」
「フィリアス君。　聞いてなかったね」
「……スミマセン」

いかにしてこの状況からいち早く脱出するかをつらつらと考えていたせいで、しおらしく聞いていた話を途中から全く耳に入れていなかった事にはフィリアスに非があるのだが。
そ、そんなに「怒ってますよ」オーラを出さなくても良いではないかっ！
元々余り機嫌が宜しくなかったらしい友人を、どうやら完全に不

機嫌の方向へフィリアスは天秤を傾けてしまったらしい。
ただでさえ、”王立魔導学院”の長衣（ローブ）は目立つ上に、何せ彼は時の人。
店内のあちこちから（特に若い女性層）熱い視線を受けているし、その相手が何というか可も無く不可も無く…ええい、言ってしまおう、地味な髪と目とついでに平凡以下の顔立ちでの、王都ではある意味有名なフィリアスが一緒に居るのだ。
先程からチクチクとした視線が非常に痛い。
魔導師達も驚いていたが、フィリアスと学院の星であるヴィーツェルアは何を隠そう”友人”なのである。
出会った頃はもうちょっと良い性格だった気がするのだけれど。と、意識を過去へと飛ばしかけたところで若草色の瞳がフィリアスを睨むように見ている事に気付いて、フィリアスは慌てて姿勢を正した。

「フィリアス君」
「は、はい」
「また聞いてなかっ」
「すみませんすみません聞いてませんでした！でも今からはばっちりお話をお伺いしますのでどうぞ思う存分話してください！」

すっ、と奇麗な瞳が細められた。
だがそれを正面から受け取るフィリアスは、肉食の獣に食べられる五秒前な気分であった為、青褪めた顔で呼吸を挟まず一気に捲くし立てると、天下の魔導師様は「チッ」という雰囲気を残して剣呑な雰囲気が霧散した。
食べられるのは御免である。
「ねえ、フィリアス君。　今回の事は確かに彼等も悪いけれど……

君にも、非が無いとは言えない」

はい？何を言い出すのだ、この人は。

フィリアスは思わずケーキへと伸ばしかけた手を止め、まじまじとヴィーツェルアを見返した。だが、そこにある若草色の瞳に真面目な色しか確認できず、悪戯に混乱を誘う。

理解出来ません。ヴィル、貴方の言葉は毎度難解です。

「君が悪戯にそうやって毎日を過ごしているから、学院内で不満を持っている者が増えているのも事実だという事だよ」

「何故」

珈琲を軽く一口飲むと、ヴィーツェルアはテーブルの上に軽く腕を組んだ。

嗚呼、余り聞きたくないなあ。

これから言われるであろう事は、流石のフィリアスでも予想がついた。勿論、心の準備が出来ているか否か、というと又別問題なのだが。

「確かに受験基準には決まりがない。　けれど、皆”一度きり”という覚悟で以って試験に挑むのに、君だけは素知らぬ顔で毎年受験する――例え理不尽でも、感情を持つ人という生き物である以上、君を応援している者も居れば、疎む者も居る」

緩やかにフィリアスの周りにある空気が冷えてゆく心地がして、重い溜息が零れた。

人の感情は、美しくも醜い。
時に、人こそが”天使”や”悪魔”だと言われるほどに、その心根は表裏一体である。
慈しみや友愛は時として嫉妬と僻みに変わり、やがて愛情や憎しみに変わってゆく。

「つまり…もう、試験は受けるなと…ヴィルも言うの？」

彼に限って、フィリアスを憎んで、という事はまず無い。
夏の生き生きとした若草を思わせる瞳には、ただ、フィリアスを案じる色が滲んでいるのだから。けれど、この先を案じてだったとしても、ヴィーツェルアの言葉を素直に頷く訳にはフィリアスはいかなかった。

「違う。　……無詠唱（ノンスペル）を使うんだ」
「ヴィル！」

これに慌てたのはフィリアスだった。忙しなく周囲に視線を向けると、咎めるような視線をヴィーツェルアへと送るが、対する魔導師の青年は悪びれた風もなく言葉を続けた。

「私よりも君のほうが余程力があるというのに、このままここで枯れさせる訳にはいかない。　世界でも数人と居ない……精霊を見、精霊と意思を交わす導き手なのだから」

フィリアスは呪文(スペル)を唱えることが出来ない。だが、魔法を使う事はできる。
通常、魔法を行使する際には鍵となる呪文(スペル)が必要であり、呪文(スペル)無くして様々な奇跡の結晶とも言われる魔法を生み出す事はできない、というのが一般的な常識である。しかしながら本質は、世界に息衝く人ならざるもの達から目を背けた結果、呪文(スペル)という強制力を持ったものが無ければ魔法を生み出せなくなってしまっただけなのだ。
人々は目先の利益と栄光に、古の神話を読み返すことも忘れているだけ。

それこそ、赤子の時から精霊達を見てきたフィリアスが呪文(スペル)を使わないのは至極当然の事であったし、使わずとも”願えば”彼等は笑顔で力を貸してくれた。
だが、それが周囲の人にとって当然の事でないことくらい、王都から遠く離れた辺境の村で育ったフィリアスとて分かる。何せ、村人達の誰一人として、フィリアスのように呪文(スペル)なしで魔法を使う者は居なかったのだから。
故に、自然と人前で魔法を使う事が少なくなったフィリアスは、魔力(マナ)の強さを感じられない自分の容姿も相俟って、より一層落ちこぼれの扱いを受けていた。

それが何故、”風の詠み手”と言われる未来明るい魔導師の青年からここまで言及されているのかというと、単純である。
数年前。彼と出会ったばかりの頃。
フィリアスが呪文(スペル)を唱えずに魔法を発動させたところを目撃された為だ。あの時は色々とあり過ぎていて混乱していたし、ヴィーツエルアの怪我を治す事で頭が一杯一杯だったから躊躇いは無かったのだけれど、まさかここまで彼がご執心になるとは…いやはや。

「フィリアス君。　君という人は……」

大体、自分の力というよりは当たり前のことを当たり前にしているだけであって、偉大だの何だのと言われても困るのだし……と、再び思考の海へつらつら沈んでゆこうとしていたフィリアスの意識を一気に引き上げたのは、他ならぬヴィーツェルアの低い声だった。

いけない。また話を聞いていなかっ、いえ聞いていましたとも。

ヴィル、貴方の機嫌をこれ以上損ねるくらいなら、一度に十人の話を聞いてすらみませますとも！と、強気に思いはしても、実際には何とも情けない声がフィリアスの口から零れた。

「で、でも、ヴィル？　私はやっぱり――」

「呪文（スペル）を唱えられない君が、どうやって学院に入る？何度受けたところで、結果を見せなければ入れぬ場所である事くらい、君は分かっている筈だ」

分かっている。一度目は勢いだった為今考えれば受かる筈も無いが、回数を重ねるにつれて如何に呪文（スペル）を完全に、完璧に、そして如何に美しく使えるかを求められる。

上位魔導師（ハイウィザード）達ですら、”見えていない”のだ。

それは当然の事だった。

「だからって……」

「……やはり、あの時の事を引きずっているんだね」

嫌悪と畏怖に彩られし瞳。

戦慄く唇が悲鳴を伴って、あの夜に響き渡る。

そして、フィリアスの心に決して抜けぬ杭を穿つように、叫ぶのだ。

”――――――!”

見えぬはずの闇に足元から飲み込まれてゆくような心地を振り切る為、フィリアスはゆっくりと息を吐き出し、一度だけ強く目を瞑った。

いけない。悪しき思考は断ち切らねば。

「そういう、わけじゃないの」

「だが……」

「大丈夫。　心配してくれてありがとうヴィル……もう少しだけ、がんばらせて」

フィリアスの嘘までも見通してしまうような、鮮やかな彼の瞳が今は眩しい。

気遣わし気なヴィーツェルアの視線を直視できず、少しだけ俯きながらフィリアスは笑みを深めて見せた。

「それに、来年こそは合格しないとそろそろ本当に呆れられちゃいそうだし……ヴィルも、ミルリィだって、待ってくれてるん……だよね」

「当然だ。　今日だって本当は、君を浚ってでも学院に連れて行くとミルフェルリア君が意気込んでいたのを、何とか宥めて私だけが来たのだから」

「さらっ……！？」

どうしてこうも気の強い友人が多いのか。
分かっているけれども、私の意思は無視なんですね分かります。
とても明るく社交的だが、どうにも猪突猛進的な”友人”を思い起こすと、フィリアスは乾いた笑いを浮かべた。

フィリアスは少なからず周囲の人に恵まれていると思う。
友人という存在がいなければ、”聖域の森”で交わした約束を叶えられぬまま早々に王都から去っていただろうし、共に働く同僚達の優しい言葉に何度救われたかしれない。

だからもう少し。
もう少しだけ、時間が欲しい。
何とも都合の良い話だが、あと、少しだけ。

「それじゃあ、ミルリィに今度会いに行くからって、伝えておいて」
「分かった……フィリアス君、気を付けるんだ。　君は思った以上に見られている」
「……うん。　ありがとう、ヴィル」

後悔先に立たず。
ヴィーツェルアの警告をもっと真剣に考えていれば良かった、とフィリアスが酷く後悔したのは、どうにもならない渦中に巻き込まれた後だった。

躊躇い（後書き）

誤字・脱字やレイアウト、感想・アドバイスなどございましたら是非お寄せくださいませ！

王子様の苦悩（前書き）

フィリ視点～イクス視点です。

王子様の苦悩

夕刻、フィリアスはヴィーツェルアと別れ、自宅への帰路をぶらぶらと辿っていた。

何というか、考えが纏まらずに混乱している。困惑しているとも言うのか。今迄目を背けていた事が、急に目の前に突きつけられて思考が対応出来ていない。

もやもやとした言い知れぬ感情が胸の奥で渦を巻いて居座っており、これはきっと暫く消える事はないだろうとフィリアスには分かっていた。

ヴィーツェルアの御蔭で、仕事は休みである。

これからフィリアスには特にこれといった用事も無いし、今の状態ではきっと何も楽しくはないだろう。ならば、自室に戻って熱い珈琲でも飲みながら、読みかけの本を読むのも良いかもしれない。

そうと決まれば善は急げである。フィリアスは、先程よりも少しだけ弾んだ足取りで石畳の通りを軽い足取りで進んだ。

●●●●●

”聖域の森”の近くにある村から、フィリアスが王都へやってきてから約五年と少し。

フィリアスの住居は、大通りから一本細い道に入り、直ぐに目に入る宿屋の三階だ。

右も左も分からぬ当時のフィリアスを、気の良い店主が使わぬ部屋を紹介してくれてから、ベッドと簡素な木のテーブル、後はちょ

っとした調理器具を置いたら殆どスペースの無い、部屋と見紛う程小さなこの部屋がフィリアスにとって居心地の良い”城”である。

「お、おかえりフィリ！今日は早いねえ」

ちょっと頭髪の後退が気になるが、それ以外では中年と思えないがっしりとした体格と、気さくな性格で、訪れる者の多い宿屋の店主ペテロがフィリアスの姿を認めると、声を掛けてきた。

「ただいま、ペテロさん。　えーと…ちょっとお休みを貰って」
「おや、体調でも悪いのかい？なら早く部屋に戻ってしっかり休むんだよ！」

体調は頗る（すこぶる）良いのですが、強いて言うなら精神的にでしょうか。
心配そうに聞いてくれるペテロへ、ちょっと曖昧な笑みを浮かべるとフィリアスは優しい言葉に甘える事にして、一階から二階、二階から三階への階段を上がり始めた。

三階の西角、小さな飴色の扉がフィリアスの”城”へ続く入り口だ。入り口自体は少々陰になっていて薄暗いが、フィリアスが扉へと近付くと、壁に据え付けられているランプが火種も無いのにぽうっと淡く灯った。

「ただいま。　ありがとう」

フィリアスから”見れば”、火の精霊が鍵を開けやすいようにと灯りを点けてくれたのだが、他の者には見えてはいない。だが、此

処には今フィリアスしか居無い為、嬉しさを隠さずに言葉に出して礼を述べると、火の精霊は人間だったら照れたように淡く明滅した。
嗚呼、可愛いなあ。多少荒んでいたフィリアスの心境は、嘘の無い精霊の慈しみに溢れた行動にすっかりと癒され、頬を綻ばせながら鍵を開けた。

――ぴぴぴ。
「あ！」

ぱたぱたと羽音を震わせ、扉を開けたフィリアスに真っ白な存在が飛び込んできた。
純白の羽と、淡いクリーム色の嘴が可愛らしい小鳥。そして、小鳥がちんまりと嘴に咥えている三つ葉（クローバー）の葉に、フィリアスは、思わず歓声を上げた。

「イクスからだ！」

先日フィリアスが送った返事を、イクトゥースが返してくれたらしい。
うわ、どうしよう嬉しい！逸る心を抑えもせずに、「褒めて、褒めて」とばかりに囀る小鳥の羽を指先で撫でてから、小鳥の足首に結び付けられていた小さな紙を紐解いた。

●●●●●

親愛なるフィリ

怪我に関しては心配しなくても大丈夫だよ。
軽く切っただけだし、俺も男だから怪我の一つや二つで体調を崩すなんてないから。

…フィリが学院に落ちる、なんて事は本来なら有り得ない。
フィリはそこまで自覚が無いようだけど、精霊を見る事ができるだけで稀有なんだ。どうせ、君の事だから申告なんてしてないんだろうけど。
それに、試験内容を聞いたよ。あんな基準馬鹿馬鹿し過ぎるだろう！
呪文（スペル）を唱えずに発動したものは無効、選考基準外なんて……だからフィリが受からないのか、やっと納得したよ。
いっそ、俺がフィリを直接指名して、上位魔導師（ハイウィザード）にしてしまおうか。

●●●●●

「ひえっ……」
喜色を湛えて文面を読み進めていた薄桃色の瞳が、丸く見開かれる。
それから、すぐさまテーブルへ腰掛けると、猛然とした速度で返事を書き始めたのは些か仕方の無い事やもしれぬ。

●●●●●

親愛なるイクスへ

なら良かった！
王城には傷なんてあっという間に治せる魔術師が沢山居ると思うけど、やっぱり不安だったから。いくら剣の稽古だからって、無茶しちゃ駄目だからね！

…き、聞かれてないから言ってない…けど…でも、精霊が見えるのは私の力じゃないもん。
だから、それを私の能力です、って言うのは自分の力じゃなくて、ズルして受かるような気がするから嫌なの。
イクス！私、そんなの嬉しくないし、なりたくない！
何回落ちたって、イクスが応援してくれるから頑張れるのに…呪文だって、唱えられるように練習してるから、きっと来年は…受かってみせる。

だから、そんな事言わないで？
……ごめんね、イクス。

●●●●●

「殿下、本日は随分と荒れていらっしゃるようで」
「俺は落ち着いている」
「ふうむ、手紙を御読みになる際は、そこ迄震えられるものなのですなあ」

ぴくり。
胡乱気に細められた青金石色(ラピスラズリ)が室内で待機している人物へと向けられた。頬に掛かる金色の髪から覗く其の目は、かなり剣呑だ。
此以上は危険かと長年此の青年へ仕えて来た老執事は丁寧な所作で以って深々と腰を折った。

「顔を上げろ、フェレス」
「失礼を致しました…殿下を悩ませているのは、フィリアス嬢でいらっしゃいますかな？」

重い重い溜息が零れ、主からの許しを得てからゆっくり、フェレスと呼ばれた老執事が腰を伸ばすと、汚れ一つ無い白手袋に包まれた指先で、主である青年が持つ手紙を指し示した。
それこそ、青年が赤子の頃から仕えているのだ。目下此処数年、主の思考を占めている存在等直ぐに思い浮かび、微かな苦笑を白い口髭に湛えて問い掛けると、つい五分程前に白い小鳥が運んできた”返事”へ老執事は目をやる。

「確か、今年の試験も残念な結果であったとか」
「俺が問題にしているのは其処じゃない。　どうして……」

フィリアス嬢は、主と交わした幼少の頃の約束を守る為に王都へと一人赴き、”王立魔導学院”の入学試験を毎年受験して居た筈で

ある。
今年も進展は無い。さぞ落ち込むだろうと思っていたフェレスだが、現在我が主を悩ませている原因は其処では無いらしく、王国の第二王子として、”一人の女性以外”で冷静沈着さを失わない主としては珍しい。
おや？と思った事が顔に出ていたか。少し顔を顰めていた横顔がフェレスへと向けられると、微かに苦しさを押し隠したような苦々しい笑みを浮かべた。

「フィリはいつも、苦しい事や悩みを俺に教えてはくれない。　去年フィリが怪我をした事も、今日……愚かな馬鹿共が市場（マーケット）でした事も」
「……ご報告しようと思っておりましたが、ご存知でいらっしゃいましたか」
「矢張り、傍に居れない俺は……信頼に値しないのだろうか」
「殿下」

五年。故郷を離れて五年目だ。
送られてくる手紙には、何時も楽しかった事や驚いた事、そしてフィリアスではなくイクトゥースの身を案じる内容ばかり。
辛い事、苦しい事、痛い事――彼女は晒そうとせぬ。
傍に何時も居てやる事が出来たら、どんなに良いだろうか。イクトゥースは心の中で嘆いた。去年の怪我にしても、忍びで見舞いに行った時、薄桃色の優しい瞳をそっと細めて、儚く笑っていた細い身体が忘れられない。
王子等という肩書きは、見えぬ鎖でイクトゥースに絡み付くだけ

ではないか。

何と無力だろう。悲しみの気配を敏感に察知したのか、膝に飛び乗りぴぴ、と鳴く小鳥へイクトゥースは切なさと悲しみに満ちた眼差しを送った。

「お前が、俺だったなら良かったのに」

王子様の苦悩（後書き）

王子様だって悩んでるんです。

評価、感想、アドバイス等いただけましたら嬉しいです^^

這い寄る厄災（１）（前書き）

ＰＶ５０００越え、本当にありがとうございます！
百合ではありませんが、女性同士のちょっとした絡みがあります。
苦手な方はご注意を。

這い寄る厄災（1）

幸福とは。
望むだけでは手に入らず、相応の努力を以ってして漸く得られるもの。
努力を怠れば、忽ち水の如く手から零れ落ちる。

厄災とは。
望まざるとも密やかに足元へ忍び寄り、気付いた時には蔦のように絡み付く。
足掻けば足掻く程締め付けて、仄けき絶望を齎して嘲笑う。

全く以って不条理だ。

●●●●●

「はっ、はあ……！はあ…！」
ああもう、一体どうしろというのだ！

フィリアスは、夜の王都を全力疾走していた。
折角綺麗に梳いてもらった髪がボサボサになるじゃないかどうしてくれる！という毒吐きも、この状況が長引く程にそんな事を考える余裕等フィリアスには残って居なかった。
日々立ち仕事をしていて体力に余裕を持っていたというのに、長時間速度を緩めずに走っているせいで心臓が破裂しそうに脈を打ち、時折窒息しそうな程息が詰まる。時折擦れ違う住民達の奇異に満ちた視線を恥ずかしい等と考える時間も、暇も無く、悲鳴を上げ始めた筋肉と骨の関節が切々と痛んでも、ふらつく足を止める訳にはいかない。

よくよく考えてみれば、幾らフィリアス自身が悪く無い筈だといっても暫くの間、そう、せめて”彼等”の怒りが冷めるくらいの期間くらいは、学院や魔導師達から離れて過ごすべきだった。
望まざる結果とはいえ、非が全く無いかと言われれば是と答える事が出来ない自分が歯痒く、愚かさに頭が痛くなる。

薬草学が楽しみだからって、今回くらいは我慢すれば良かった。

至らなさに思わずと涙すら零れそうになったが、疲労困憊状態の身体にはどうやら涙を一粒零す体力すら走る行為に引き摺られているらしい。眼球には涙の膜では無く、走る事で生まれる乾いた風の感触のみで、其れが余計にフィリアスを惨めにした。

●●●●●

遡る事数時間前、昼を少し過ぎた時間。

フィリアスは”王立魔導学院”の敷地内にある、とある講義室の一番隅で、目立たないように学院の制服である長衣（ローブ）の色に似た布で頭からすっぽりと覆い隠し、至極の一時を過ごしていた。

何故毎年不合格となっている学院にフィリアスが居るのかというと、簡単な事である。

確かに、合格せねば専門的な勉強等出来ず、魔導師にもなれぬ。しかしながら、幾つかの教科の幾つかの授業に於いては、魔法に興味を持つ者なら誰でも見学が出来るように、一般の者にも門戸が開かれているのだ。

その一つに”薬草学”というものがある。直接魔法とは関係が無いように思えるが、調合一つで様々な効果を齎す効果は、決して人だけに留まらず多少なりと大地を潤し、干して乾かし粉にしたものを濁った水へ根気良く撒けば、軈て精霊達の居心地良い自然へと還る。

つまり、人だけで無く自然そのものと向き合う事のできる薬草学を学べる絶好の機会であり、何よりフィリアスはこの薬草学がとても好きだった。

呪文（スペル）を使わず、精霊達を従わせず、自分の手と自然の力を少しだけ借りて、人は世界と共存出来るのだから。

故に、この五年近くの間フィリアスは薬草学を始めとし、参加する事を許された幾つかの授業にひっそりと潜り込んでは熱心に講義

へ耳を傾けていた。
本来であれば今日の講義も意気揚々と参加するつもりであったのだ。
ただ、数日前に市場(マーケット)で受けた悪意をすっぱりと忘れられる程フィリアスはお気楽な性格では無く、見た目に分からずとも内心では多少なりと引き摺っていた。だから、少しでもあの時の魔導師達と遭遇する可能性が高まる学院に行く事を一度は躊躇い、諦めようかとも思っていたのだが。

「……やっぱり来て良かった」

葉の僅かな成長具合で、効能が全く異なる珍しい薬草の特徴を細かに羊皮紙へ書き記していた手を止め、綻んだ顔を隠そうともせずに、フィリアスは一人ごちた。
学院からこの講義室に入るまでは、出来るだけ目立たないように敷地の端を歩き、過日の魔導師達と出くわさない事と、同じ講義に居ない事を切望しながらだったのだが、どうやら杞憂に終わったようだ。

それもそうかもしれない。
フィリアスは心中にて微かに苦く呟いた。

四人が四人、皆全身から矜持(プライド)と自信を漲らせていたのだ。魔法を”自在に”使えると思っている彼等が、薬草学の、それも一般人も参加出来るこの講義に来る筈も無い。そうは理解していても、ある意味目立つ髪と瞳の色を隠す為にこんな衣まで用意してしまったのが何だか恥ずかしい。
乙女心は複雑なのだ、うむ、そういう事にしておこう。

「――では、本日はこれまで」

フィリアスが一人意識の淵で納得している間に、残り少なかった講義の時間も終了を迎えたらしい。深く落ち着いた、叡智に満ちる黄金（きん）の瞳を柔らかく細め、白髭で口元の見えない高齢の老魔導師が終了の合図を告げると、皆それぞれに次の講義や、暫しの休息を得る為に軽い足取りで出て行く。

一般人が見学する事の出来る講義は、今日はもうこれだけだ。フィリアスは羊皮紙を丁寧に畳むと長い衣の内側へと仕舞い込み、ゆっくりとした足取りで出て行く老魔導師へ頭を下げてから、未だ日差しの眩しい外へと踏み出した。

さて。

部屋に帰ったらイクスに手紙を返して、講義の復習をしよう。

小さな至福の一時を思い、頬を綻ばせながら部屋へ戻るべく、フィリアスが出口へ向かい歩き出したまさにその時だった。

「フィリお姉さまあああああああああああ！」

「……っ！？」

――がすんっ！

くびが、くびのほねがいやなおとをたてました。

突如として響き渡る歓声混じりの声に、周囲がぎょっとする間も無く、背後から物凄い勢いで飛びついてきた物体にフィリアスは地面へ蛙のように押し潰された。勿論、受身等取れる筈も無く、首と顎とその他諸々の箇所に感じる疼痛に軽く呻いた後、剣呑な眼差しを押し潰した侭、離れる気配さっぱりと見せぬ人物へ向けた。

けれど、すぐに薄桃色の瞳は丸く見開かれる。

「ミルリィ！」

「お姉さま！お会いしたかったですー！」

腰迄あるふわふわと曲線を描く柔らかな髪は、水に青を少しだけ溶かしたような、水銀の輝きを纏った淡い水色。長い睫毛に縁取られたオリーブ色の瞳はきらきらと輝いていて、知らぬ者が見れば陶器人形（スクドール）に命が吹き込まれたと錯覚する程の、天使と見紛う整った造形。

しかし、少女が身に纏う長衣（ローブ）と、左胸部分に輝く宝珠のブローチは、鮮やかな翠玉（エメラルド）であり、”王立魔導学院”の魔導師（ウィザード）だと分かる。

ミルフェリア・フォーレルランス。

古くから続く魔導師の一族内でも歴代に入ると言われている少女。フィリアスよりも小さな身体に並々ならぬ魔力（マナ）を秘め持ち、操る魔法は正確無比。

二つ名こそ与えられていないが、”風の詠み手”の二つ名を持つヴィーツェルアと並び、本来ならフィリアスがこのように滑らかな

頬で擦り寄られる事等あってはならぬ程に、有名な存在だ。
それがなぜこのように殺されかけ…いやいや、過剰に懐かれているかと言うと、彼女はヴィーツェルアと遠縁にあたり、幼馴染なのだ。その関係でヴィーツェルアを介して知り合い、フィリアスよりも年齢が一つ下というだけだというのに「お姉さま」と呼んで憚らず、何が良かったのか此の懐かれ様。
ヴィーツェルアとミルフェリアが二人並んで立って居るところなんて、ちょっと似た容姿が神掛かっていて非常に眼福もの、不可侵にすら思えるというのに。

ええい、ぴったりひっついて頬に擦り寄るのは止めなさい。
いや、滑らかな肌はすべすべで気持ち良いけれども！
様子を見ている周りの魔導師（ウィザード）達が引いてますよ！

「先日お伺いしようとしていたのに、ヴィルが止めるからお会い出来なくて……でも、今日は薬草学の公開講義があるから、終わるのを見計らってましたの！」
「そ、そう……一緒に講義、受ければ良かったのに」

フィリアスが薬草学を始め、一般人にも公開されている講義に足繁く通っている事はヴィーツェルアもミルフェリアも既知の事だ。その為、日程（スケジュール）さえ知っていれば、会う事等造作も無いのだが。

「ふふ、お姉さまは講義を受けていらっしゃる時、誰よりも真剣で、誰よりも楽しそうなんです。　それを私が横から邪魔する何てできません」
親愛表現（スキンシップ）は毎回少々過激で、その度にフィリアスは身体の何処其処が痛んだりだとか、心臓が冷える思いをするのだが、彼女を疎めない理由はここにある。

ヴィーツェルア同様、ミルフェリアも又フィリアスを”友人”だと、認めてくれているのだ。講義は一時間以上に渡る、その間妙なところで律儀なこの友人は、きっと外で待っていたのだろう。フィリアスに会う為だけに。

もしも自分の性別が男だったなら、問答無用でお嫁さんにした。いや、ミルフェリアが断る可能性だってあるのだが、それくらい良い子である。

「ありがとう、ミルリィ」

「私がお姉さまにお会いしたかっただけですもの！お礼を言われる事なんてありません」

はにかんだように微笑む仕草がフィリアスだけでなく、周囲の魔導師達（イザード）にまで影響を与え、顔を赤くしている者も居るが知った事ではない。

この笑顔は、今フィリアスだけのものなのだ。乙女は可愛らしいものに目が無いのです。

漸く地面に押し倒した侭、会話を続けていた事に気付いたらしい。慌ててフィリアスの上から移動し、起き上がりやすいようにと手を差し伸べてくれるミルフェリアへ、手を伸ばそうと持ち上げた時だった。

「……何故お前が此処に居る！」

空気を裂くような鋭い叱責に、和らいでいたフィリアスの気持ちが一瞬で張り詰める。

語調に含まれる、隠し切れぬ感情は嫌悪と、憎悪にも似た負の響

き。自分と違うものを嫌い、嘲るその声色など誰が言ったかを確認せずとも、フィリアスにはすぐに分かった。

ミルフェリアに飛び付かれた時、被っていたフードが落ちて、フィリアスの目立たぬ灰色の髪と薄桃色の瞳が露になっていたのだ。嗚呼、それでか、と嫌に冷静な頭で淡々と思考を巡らせると、フィリアスは地面から半身を起した状態で、ゆっくりと首だけを背後へ巡らせた。

「不具のくせに……」

小さく、微かな呟きこそが毒を孕んだ針。

先日市場(マーケット)で出会った四人の魔導師(ウィザード)達のうち、三人が蔑みの眼差しをフィリアスへと向けて、立っていた。

這い寄る厄災（1）（後書き）

評価、感想、アドバイス等いただけましたら嬉しいです^^

這い寄る厄災（2）

フィリアスは嘆く。

本来、魔法に通ずる魔力（マナ）とはユーフォリアの人へ、神々と精霊達が与えた祝福であり、それは決して優劣を付けるべきものでは無い。強いも、弱いも、人が判断し”祝福”に付けてはいけないのだ。

嘆きの意味を理解出来る者は、今は酷く少ない。

それがフィリアスを、余計に悲しくさせた。

●●●●●

「此処は、お前如き者が来て良い場所では無い！」

穏やかだった空気は、そのたった一言でぴりりと鋭さを帯びた。

奇異の眼差しであっても、決して排他的では無かった他の魔導師（ウィザード）達とて、フィリアスが件の”落ちこぼれ”であると気付くや否や、面倒事は御免だとばかりに皆其々視線を外し、そっと離れて行く。

今迄浮かべていた普段の笑みを掻き消し、少しだけ困ったようにフィリアスは笑いながら見下ろす三人組を見上げた。はて。そういえば今日は一人、市場（マーケット）では纏め役だと見受けられた銀髪の青年が居無い。

「一般人にも解放されている講義に、参加する為此方へと来ました。
これは禁じられている事では無いし、貴方達に行動を規制される権限もありません」
「生意気な、不具の娘が我等に楯突くか」
「……そんなつもりは」

先日、市場（マーケット）での出来事はどうやら彼等の中から、未だ怒りの焔を灯し続けているらしい。瞳や言動、態度から明確にフィリアスへの憎悪にも似た暗い感情が簡単に読み取れる。
助けてくれた事には感謝しているが、矜持（プライド）の高いこの手の魔導師へ自尊心を傷付ける事を言えば、どうなるかくらい理解していた筈なのだ。
ヴィルめ、余計な事を公衆の面前で言ってくれたものですね。
内心で、”風の詠み手”たる友人へ助けてもらった事は一先ず棚に上げ恨み言を零しながらも、別の意識にてフィリアスはこの現状を如何するべきかと頭を抱えていた。激情に駆られた人間程、厄介なものはない。

「……先程から聞いていれば……」

小鳥が囀るような、可憐な声であるというのに、この威圧感。
背に嫌な汗が生まれるのを感じながら、恐る恐る振り返ったフィリアスは、忽ち自分の行動を心から後悔し、ひえええ！と、心中で悲鳴を上げた。
「お姉さまはお優しいから何も言いませんけど、無礼な態度は私が許しませんよ」

「ミ、ミル……」
「生皮切り刻まれるのと、服を剥がれて放り出されるのはどちらが宜しいかしら？」

ああ、今すぐ卒倒したい。
軽く首を傾けて、いっそ優雅に微笑む様は美しく完璧だというのに、オリーブ色の瞳は凄絶に輝いて三人の魔導師達を射抜く。
まるで今日の夕飯の話でもするように、何気なく問い掛けた内容が咄嗟には理解出来なかったのか、一瞬惚けたようにミルフェリアを見ていた魔導師達は、次の瞬間意図を理解してサッと表情を変えた。

「ミルフェリア・フォーレルランス……！？」

どうやら、憎きフィリアスを見付けた事で、丁度陰になったミルフェリアは眼中に無かったらしい。だが、此処迄見えぬ重圧が増せば、流石に意識が向かざるを得ない。
そして、ミルフェリアも又、魔力（マナ）溢れる実力者。
例えそこそこに力有る魔導師三人とて、叶わぬ相手なのだ。顔色を変えるのも無理は無い。

「私の名をみだりに呼ばないで頂けますか？お姉さまを侮辱する様な下賤の輩に、お姉さまも、私の名も呼ぶ資格を与えた心算（つもり）はありませんけれど」

――うわあああああああああっ！
可愛らしい声で何という事をさっぱりさらりと言うのですかこの人は！
背だけで無く、額にまで滲んできた汗を拭う余裕すら無く、人形のように可愛らしい外見に似合わず猪突猛進且つ、毒舌な少女が行

動に出る前に、フィリアスはミルフェリアの口を後ろから必死に押さえ付け、自分でも驚く程素早く立ち上がった。

「たっ、た、た、大変失礼を致しました！今直ぐに学院から出て行きますので！」

「お姉さま！どうしてお姉さまがむぐっ」

「栄位なる魔導師の皆様、精霊と神々の祝福がありますように」

手から逃れたミルフェリアが、尚も言葉を吐こうとしているのを再度阻止したのは我ながら良い仕事をしたと思う。この侭ミルフェリアに話させていたら、そのうちに血の雨が降るに違いない。

むぐむぐと手の下で未だ何か喋っているミルフェリアを押さえ付けながら、魔導師三人へ引き攣った笑いを浮かべると、何か言われる前に、或いはミルフェリアが実力行使に出る前にクルリと背を向けてミルフェリアをしっかりと抱え、脱兎の如く駆け出した。

「何故！……風の一族……不具……庇護する……！？」

全力で走っている為、風に阻まれて鼓膜を震わせる声は途切れ途切れだ。

それでも、滲み出る憎悪と、言いたい事はフィリアスにも理解出来る。

考えても詮無い事に、ふと口角が緩んだ。

何故。何故だろうか。

ヴィーツェルアも、ミルフェリアも、”風の一族”と呼ばれる古より魔導師を多く輩出する貴族の血がその身を流れている。本来な

ら、孤児であるフィリアスとの接点等万に一つも無いのだ。
正直、フィリアス自身不思議であった。呪文(スペル)を使わずに魔法を発動させる事が可能である、この時代ではある意味特異体質だから、という理由だけで無いのは明白だからである。
唯の興味で、何年も共に過ごしたりはしないだろうし、こうまでして助けてくれようとも思わないだろう。ううむ、実に不可解だ。以前この事を二人に問い掛けたら、顔を見合わせて笑うだけで教えてもらえなかったし。
まあ少なくとも好いて居てくれているので、問題は無いのだけれど、と思考を飛ばしていたフィリアスは、必死に腕を叩く掌の感触に漸く気付き、慌てて友人の口を押さえていた手を離した。まずい、顔が青くなっている。

「……ひどいです」
「ごめんね、ミルリィ。　庇ってくれたのは嬉しいけど、ミルリィまで目の敵にされる必要は無いよ」

そっと背後を振り返る。良かった、どうやら追っては来ていないようだ。
軽く乱れた呼吸を整えながら、フィリアスは友人の小さな身体を開放した。何ですかその恨みがましい目は。どうしてこうも、ヴィルといいミルリィといい、見た目に似合わぬ性格の持ち主なのだ！
「納得いきません！あんな事を言われるなんてっ！お姉さまは学院一……いいえ、この王国でも屈指の魔力(マナ)と力をお持ちだというのに！」
「ミルリィ」

本当に優しい娘だとフィリアスは思う。
尊き血を持つ誇り高き貴族だというのに、身分の垣根を越えて、

これほど心配してくれている。自分が男だったら間違いなくお嫁さんに……という邪推を脇へと除けて、フィリアスは軽く首を振る事で、それ以上ミルフェリアが続ける事を拒んだ。

「有難う、ミルリィ……でも、良いの、言いたい人には言わせておけば。　それに、私には、私の事を分かってくれている人がいるから」

二人の友人と、イクトゥースが居なければフィリアスはとっくの昔に村へと帰っていた。

今、ここにこうして居られるのは、間違い無く皆の御蔭なのだ。

「だから、平気よ」

この気持ちに嘘は無い。

フィリアスは絶句するミルフェリアへ、心からの笑顔を向けた。

●●●●●

……それで彼女が納得する筈も無く。

散々「お姉さまは優しすぎます」とか、「もっと危機感を～」とか、挙句の果てには「あんな不届き者は切り刻んで」とか言いたい放題のミルフェリアを何とか宥め透かして落ち着かせた後、一緒にお茶をして、フィリアスの髪を梳かしたいと言うので弄られて、どうにかこうにかご機嫌を回復するに至った訳であるが。

うううう！
此処数日、心休まる日が無い気がする。
危ないから自宅としている宿屋まで送る、という提案を丁重に断ったのがいけなかったのだろうか。いやだが、あんな二頭立ての高級馬車で送迎された日には、尾ひれがついて噂になりそうだし……。

――ビシッ！
「……ッ！あ、危なっ、街中で攻撃魔法を使うなんて！」

ちょっとした思案すらどうやら”追手”は許してくれぬらしい。
全力疾走する足元の石畳が鋭い音と共に弾け飛ぶと、慌ててフィリアスは手近な路地へと飛び込み、建物の陰に身を隠した。
荒ぐ呼吸すら、無理矢理に隠して息を潜め、身体を小さくすると、先程までフィリアスが走っていた路地の先を殺気立った複数の気配が凄まじい速さで駆け抜けて行く。ぴりぴりとした気配が完全に感じられなくなってから、漸くフィリアスは押し殺した呼吸を開放し、息を整えた。

ミルフェリアと別れ、自宅へ向かっていたフィリアスをまるで見張っていたかのように現れたのはあの三人の魔導師であった。また何かと警戒する暇も無く、問答無用で腕を掴み、何処かへ連れて行こうとする三人に身の危険を覚え、咄嗟に腕を振り払ったものの、その結果がこれである。
かれこれ数十分は王都を追い掛け回されている。自分の足で逃げているフィリアスと違い、風の魔法を使っている彼等に疲労等有りはせぬ。此処迄逃げおおせているのは、ひとえにフィリアスが王都の地理を把握し、細かい路地を逃げ続けている為であった。

言葉を操れない小さな精霊達が、先程から心配気にフィリアスの周囲を乱舞している。大丈夫との意味を込めて、微笑みながら立ち上がったフィリアスの表情が瞬時に強張った。

『ラル・レイラ』

「――っ！」

声にならない悲鳴がフィリアスの口から零れ出る。

目の奥が眩い程にちかちかと明滅し、身体中を不快な痺れが覆い尽くす。

電撃の魔法を当てられた、と理解した時には、フィリアスの身体は暗い石畳へ倒れていた。痺れた身体では上手く受身を取れず、どうやら後頭部を打ったらしい、ずきずきと疼痛を齎す痛みが逆に自由の利かぬ身体の代わりに、意識を明瞭とした。

「ちょこちょこと、鼠のように……」

通り過ぎた、と思って居たが、どうやらしっかり見付かっていたらしい。

先日、市場（マーケット）でフィリアスが持っていた果物を破裂させた、背の高い魔導師が暗闇から進み出ると、憎々しげに言葉を吐き捨てて鋭利な視線で横たわるフィリアスを睨み付けた。

華の乙女に対して、遠慮と云うものを知らぬらしい。身体の痺れは舌先に迄及び、喋る事の出来無いフィリアスを鼻で笑うと、フィリアスに向けて掌を翳した。

『スリファ・アル・レムリア』
――眠りの魔法。

見られている。
ヴィルは警告してくれていたのだ。何故、もっとこの言葉に注意していなかったのだろう。
何をするつもりなのかは分からないが、歓迎すべき事では無いという事は魔導師達の目を見れば分かる。眠ってはいけない、と必死に自分を叱咤しても、”呪文(スペル)返し”すら行えぬフィリアスに阻む術は無かった。

「お前等より、俺達が余程優れている事……思い知らせてやる」

一体、誰に？

その言葉の意味を深く考えるより前に、フィリアスの意識は闇へと沈んだ。

這い寄る厄災（2）（後書き）

評価・感想・アドバイス等頂けますと嬉しいです！

災禍の種（1）

フィリアスは、ずきずきとした後頭部の痛みと寒さで目を覚ました。

何だか随分と寒い。昼は汗ばむ程に暖かい春先とて、夕方を過ぎたなら衣服一枚では肌寒い季節である。寝起きの明瞭としない感覚の侭、手近な毛布を巻き付けようと動いた手が、はた、と停止した。

ここは、自分の部屋では無い。

「ッ……！」

意識を失う直前の出来事が、突如鮮明に記憶へ浮上し、身体へ受けた衝撃を思い出すように身体が小さく跳ねた。ああ、思い出してしまった。

あの魔導師（ウィザード）達に散々追い掛け回された後、あろうことか街中で攻撃魔法を使った挙句に眠らされて――其処から、フィリアスの記憶は欠落している。急に頭を動かすと鈍い痛みが増す為、そっと後頭部を片手で押さえながら、フィリアスは寝ていた石床から身を起した。身体中がギシギシと悲鳴を上げている。

固い石床の上で寝ていれば、身体も冷えるというものである。

フィリアスが眠りの魔法で意識を失った時間より、随分と陽は夜に傾いたらしい。

室内は真っ暗で、明りの一つも無い。微かに羊皮紙のような香りがする事から、恐らく何処かの納屋や倉庫のような場所だと見当は付くものの、未だフィリアスの目は闇に慣れておらず、室内の広さすら分からない場所を不用意に動く事は躊躇われた。

あの時、強制的な眠りに引き摺り込まれてゆくフィリアスが最後

に見た、魔導師の目が映していたのは――嫌悪と蔑みと、微かに見えたのは、焔の如くに揺らぐ憤怒であった。
分からない。学院の中でも、そこそこの魔力（マナ）を持っているように見受けられた彼等から、どうしてあのような目を、此の様な扱いを受けねばならないのだろう。

多少明瞭となってきた視界を、より明白にするべく何度も目を瞬いた薄桃色の瞳に、ぼんやりと室内の様子が映り込む。フィリアスが寝かせられていたのは丁度室内の中心に当たり、冷たい石床から壁には沢山の棚や、鍵の賭けられた戸棚が浮かび上がっている。納屋か、倉庫だと思ったのは間違いでは無かった。しかし、ただの小屋では無い。
幾つもある戸棚には、納めきれない程に沢山の小道具が置かれていた。
宝珠と思わしき水晶珠や、鎖で厳重に封をされた小箱。動物の頭蓋骨に、埃を被った本、羊皮紙の束、何が入っているのか余り考えたく無い瓶など、普通の倉庫では先ず有り得ない代物が大量に保管、いや、物置化して置かれている。

――学院？

闇に目が慣れたフィリアスは、室内を見回してはて、と首を傾けた。
此処に置かれているのは、大半が魔導具（マジックツール）だ。
お守り程度なら市場（マーケット）でも簡単に手に入るが、其れ相応の力を宿す魔導具はみだりに人が使えば、中には暴走を招く危険なものもある為、大概が管理・保管されている。その魔導具が、王都でこれほど

無造作に、大量にある場所等学院以外にフィリアスは思い至らなかった。
どうやら、あの三人組はフィリアスを眠らせた後、わざわざ学院まで連れて来たようである。
学院に居た事を、あれ程嫌悪していたのに、何故？尽きぬ疑問と、不安に沈んでゆきそうになった思考を留めたのは、外から微かに響いてくる声であった。

背が高く、市場でも学院でも、一番にフィリアスへ何かと突っ掛かってきた魔導師の声。
確かバッシェ、と呼ばれていた青年。フィリアスは全身を強張らせた。
中傷には多少慣れているといっても、明確な拒絶や悪意を素知らぬ顔で受け続けられる程、フィリアスの精神は熟成も、達観もして居ない。負の感情は知らぬ内に、心へ澱のように沈殿して体積を増してゆくのだ。
ましてや、誘拐まがいの扱いまで受けた後である。咄嗟にフィリアスが逃げようとしたのも無理からぬ事だった。

逃げたい。隠れたい。

そう思っても、唯一の出入り口には鍵が掛かっているのかビクともせず、採光の為だけに作られたと思わしき窓も小さすぎてフィリアスの身体を受け入れられる程の大きさもない。
出来るだけ扉から遠い壁際に逃れるしか術のないフィリアスは、軈て（やがて）鍵を開ける音と共に開かれた扉の先に佇む影を、絶望的な面持ちで見詰めた。

「起きたか。　逃げもせぬとは殊勝な事だな」

予想通り、バッシェだ。
チラリとフィリアスへ視線を寄越し、嘲笑混じりに笑う。
鍵が掛かっているのに、どうやって逃げろというのだ！
しかも、扉の鍵には微かに魔力（マナ）が感じられた。恐らくはバッシェのものだろう、容易には開かぬように鍵と魔法で封じられた扉を、フィリアスが開けられぬと知っていての言い草である。
ふつふつと湧き上がる怒りに任せて、フィリアスはバッシェを睨み付けた。

「一体どういうつもりなんですか」

バッシェへの嫌悪感を抑えて、落ち着いた声を出せたのは我ながら賞賛に値する気がする。何せ、最初の出会いから今迄で、された事と言えば悉く（ことごと）フィリアスを不快にさせる事ばかりなのだ。
本当なら今すぐ掴みかかって、喚き散らしたい。

「御前は俺達よりも力が有るのだろう？その力、貸してもらおうと思ってな」
「……貸す…？」
「何、”風の詠み手”が賞賛する程だ、全く以って問題は無いだろう」

扉の入り口に凭れ掛かり、薄く笑った顔であくまでもバッシェは余裕を崩さない。
怪訝な顔をしたのはフィリアスだった。あれ程にフィリアスよりも”下”だとヴィーツェルアに言われ、激怒していたというのに、

この変わり様。
更に、力を貸せ？フィリアスの脳内に警告が響き渡る。
思わずバッシェから逃れようと、後退りした身体が壁にぶつかり、フィリアスは絶望的な気分に陥った。

「来い」
「！」

ろくでもない厄災に巻き込まれている。
大股で近付いて来たバッシェに、遠慮の欠片もなく片腕を捻り上げられた。幾ら仕事で日々動き回っているといっても、フィリアスの性別は女だ。
細身でも長身で、何より男のバッシェに力で叶う筈もなく、苦痛の中で抵抗してもずるずると引き摺るように外へ連れて行かれる。
しかも、どうやら王都で使われた電撃の魔法が未だ効力を持っているらしい、微かに痺れの残る身体では抵抗も最初の内で、望まざるに関わらず、フィリアスは扉を潜った。

●●●●●

暗い。
月が空に出ていないだけで、星の明りがないだけで、人の心は簡単に不安に染まる。
それとも、とフィリアスは周囲に視線を巡らせた。
予想通りにどうやら此処は学院の敷地内らしい。ただ、随分と外

れの方らしく、学院でも一番高い建物である大鐘塔（グランドベル）が森の向こうに、やっと少しだけ確認出来た。
この森が、何もかもを沈黙で覆い隠そうとしているように見えるからだろうか。

「準備は出来たか？」
「ああ、完璧だ。　これでジェイを見返してやれるな」
「アイツの驚く顔が目に浮かぶぜ」

バッシェに連れてこられたのは、先程の小屋か倉庫かの建物から少し森の奥へ入ったところにある、自然の広場だった。そこには、夕刻フィリアスを追い掛け回した二人が既に待っていて、何やら不穏な会話を交わして笑っている。
――ジェイ。市場（マーケット）では、纏め役だと思っていた銀髪の青年。
四人は仲間だと思っていたが、どうやらフィリアスの思い違いだったらしい。表は付き従う振りをして、その実、三人の腹の中では真っ黒な思念が渦巻いている。
そういえば、講義の時も追い掛け回された時も、あの銀髪の青年は居なかった。
とすると、この誘拐もどきは三人の独断か。成程、表面でも謙る（へりくだる）のが三人はどうやら嫌になったらしい。
三人（と後一人）で勝手にやってくれれば良いものを！フィリアスは今此処にいない、ジェイへ軽い恨みを乗せて遠い目をしたが、強く腕を引かれた事で飛んだ意識を浮上させた。

「何を――っ、痛！」

鋭い痛みが片手の指先に走る。

何時の間に取り出していたのか、小振りの短剣（ナイフ）でバッシェがフィリアスの指先を切りつけていた。見る見るうちに傷口から鮮血が溢れ出して、ぽたぽたと地面へ落ちてゆく。
乙女の柔肌に傷を付けるなんて！と、半ば唖然として自分の血液が落ちてゆく地面へ視線を落とした侭、フィリアスは硬直したように動きを止めた。

この広場中を覆い尽くす程、地面に巨大な何かが描かれている。
そして、フィリアスの血が触れたところから、線が微かに震え、淡く輝き始めた。

実際に見た事も、した事も無い。
だが、フィリアスは知識として知っていた。

認められし者には偉大なる力を与え、然して見誤れば忽ち（たちまち）裁かれるという。

これは――……

「召喚魔法陣……！？」

冷や汗が溢れるのを抑え切れないフィリアスの呟きに、傍らのバッシェ達三人が慄然とさせる笑みを湛えて、嗤った。

災禍の種（2）

精霊と神々に愛された世界、ユーフォリア。

フィリアスが暮らすこの世界と平行に存在する、《幻獣界（エルス）》と呼ばれる世界がある。《幻獣界》は、所謂天使や悪魔といった人ならざるものが存在する世界であり、通常ユーフォリアとこの世界は交じり合う事は無い。

だが、稀に位の高い、人ならざるものが次元を曲げてユーフォリアへと現れたり、魔導師（ウィザード）が召喚を行い、認められる事で存在を使役出来る。其れが召喚魔法と呼ばれるものだ。

しかしながら、この召喚魔法は非常にリスクが高い。何故なら《幻獣界》に住まうものは非常に誇り高く、召喚する魔導師が自分よりも弱いと判断された途端に、喚び出したモノから喰われるからだ。

その為、通常召喚魔法……それも、高位のモノを召喚する場合は複数人の魔導師立会いの元で召喚が行われる事が常で、たとえ失敗したとしても即座に送還出来るよう、別の魔導師も待機しているものの筈だった。

その魔方陣が此処に描かれている。

勿論、彼等とて学院に在籍してはいるが、資格を与えられた魔導師である以上、召喚魔法も学んでいる事だろう。それにしても、この陣の大きさは、ちょっとしたモノを気軽に喚びだすにしては、大きい。大きすぎるのだ。

フィリアスは自分の指先から滴る血と、滴る場所から蠢く様に脈動する陣を見て、意識が遠のくような錯覚に囚われた。

「何てこと……を……」

「問題有るまい？何せ、俺達よりも優れているのだろう？」

ねっとりと肌を這うような声も、何処か遠い。
間違い無い。フィリアスは”餌”に使われた。
何を召喚するつもりなのかは分からないが、恐らく召喚魔法陣には彼等の名前が刻まれている。そして、召喚する為の対価は――フィリアスの血。
例え召喚に失敗したとしても、最初に狙われるのは”対価”を支払ったフィリアスであり、その間により強固な契約を以ってして、盟約に縛るつもりなのだ。もしも対価が認められ、恭順の姿勢を《幻獣界》に住まうモノが見せるなら、同じくその間に陣へ刻まれた彼等の名を以ってして、従わせる。
いずれにせよ、彼等の危険は最小限であり、一番危険なのはフィリアスであった。
魔導師の資格すら持たぬ、小娘だというのに！何を考えているのかと、詰問しようと傍らのバッシェへ視線を持ち上げたフィリアスは、凍り付いた。

「俺が、俺が、俺がおれがおれがおれがおれが」
「……！」

狂っている。
魔導師とは、常に世界と在り、精霊や神々と人と、世界とを繋ぐ架け橋。
世界を学び、己を学び、そして常に叡智を求め、欲に囚われぬ。
だが、魔導師とて所詮人。

羨み、嫉み、蔑みは軈て心を蝕む毒となり、欲に突き動かされて理性を失う。
そっと、心の闇が囁く甘言だけを信じて、取ってはならぬ手を取ってしまう。

そして残るのは、哀れな魔導師の、成れの果て。
濁った眼差しで、狂ったように笑うバッシェは最早此処ではない何処か……恐らくは、皆から憧憬の眼差しで誉めそやされる自らの未来に酔って、恍惚とした眼差しをしていた。
他の二人も似たりよったりで、バッシェを煽りこそすれ、止める様子等無い。狂った者に道徳や常識を説く事が如何に愚かで、無駄な事なのかくらいフィリアスにも理解出来る。

血を吸った陣は緩々と脈動し、描かれた線に沿って燐光を散らしながら凄まじい勢いで繋がってゆく。それを見たフィリアスは絶望的な気分に陥った。早すぎる。
今なら走って学院へと向かい、師たる者達へ訴えれば召喚される前に止められるのではないかと考えていたが、とてもではないが間に合わないし、フィリアスは召喚魔法が何であるかを知っていても、他者の名で刻まれた陣を他者が破棄する方法を知らなかった。

何て事に巻き込まれているのだろう。本当なら部屋でゆっくり読書に勤しんでいる筈だったのに！此処数時間の余りに衝撃的な出来事が続き、最早麻痺しかけてきた思考で、燐光が繋がってより一層強い光を放つ光景を虚ろな眼差しでフィリアスは眺めて居たが、突如響き渡った、聞き覚えのある声に肩を揺らして振り返った。

「お前達、何をしている……！？召喚魔法陣だと！？」

魔法陣から発生する燐光に輝く銀の髪、薄蒼の瞳。
市場（マーケット）でフィリアスに水を掛けた、青年。ジェイ、と言ったか。
驚愕を隠そうともせず魔法陣を凝視する顔に嘘は見当たらず、フィリアスを襲い現在進行形で進んでいるこの異常な出来事は、矢張

りバッシェを筆頭とする三人だけで手掛けた事であったらしい。
随分矜持(プライド)が高くは見えたが、闇に足元を掬われぬ強さは持っているようだ。

「な、お前、アイシェールか？何故……バッシェ、貴様！」

流石は藍玉(アクアマリン)を持つ魔導師、訝し気にフィリアスを見た目が、次に地面へと滴る血と発光する陣に事情を一瞬で理解したらしい。
サッと顔色を変えると、ジェイは鋭く目尻を細めて名を呼ぶが、呼ばれた本人はと言えば馬鹿にしきった様子で鼻を軽く鳴らすのみだった。

「あの馬鹿……！アイシェール、お前は此方に来い」
「えっ？」

てっきり市場(マーケット)の事もあった為、フィリアスはジェイがこの場を放置するか、或いはフィリアスを見限って学院へ報告に行くのではという諦観があったのだが、予想を裏切り素早く駆け寄った手が強引にフィリアスの手首を掴み、引っ張られると驚きの声を上げた。

「何だその顔は！不本意ではあるが、お前は一般人であり、俺は魔導師だ。　そしてアイツ等は少なくとも俺と行動を共にしていた者。
ならば、答えは一つだろう」
「ジェイ……」
「勝手に俺の名を呼ぶな、落ちこぼれめ！」

憎々し気な声だろうと何だろうと、今は心底このジェイが頼りに見える。
先日水を掛けられた事は綺麗さっぱりと忘れよう。もうこれからジェイ様と呼んでもいいので、とりあえず助けて下さい。

『プロトゥース・アル・プレアトゥス』

凛と空間を揺らがせる声が響くと、フィリアスの周囲に淡い光の壁が一瞬だけ現れ、消える。数度なら物理・魔法等の外的攻撃から身を守れる上位の防御魔法だ。強い魔力（マナ）を持っているとは思っていたが、まさか上位魔法とは。

驚きに目を丸くするフィリアスをチラリとジェイは一瞥すると、苛立ち混じりに視線を学院へと投げ掛けた。

「良いか、この召喚は失敗する……陣の一部、古代文字の綴りが間違っている。　お前の血が使われている以上、真っ先に《幻獣界》のモノはお前を狙うだろう。　俺が時間を稼いでやる、今のうちに学院へ行き、師へこの事を報告しろ」

「なっ……でも、そしたら貴方が！」

「煩い、俺の心配より己の心配をしろ！俺は藍玉（アクアマリン）の魔導師だ、お前如きに心配などされずとも、師が来るまで抑えられる……さっさと行け！」

「分かった、すぐ、すぐ戻って来るから！」

召喚魔法をフィリアスは知らぬ。知らぬからこそ、如何しようも無い。

ならば、自分が今出来る一番の事は――学院へ行く事だった。

強い声に促されるようにして首を縦へ振ると、フィリアスは学院に向けて全力疾走で駆け出した。それを少しだけ見送ると、ジェイは燐光煌き脈動する魔法陣と、狂気宿し笑う魔導師へ冷え冷えとした眼差しを向けた。

「……聖魔、”月代の君”を召喚しようとするとは……この馬鹿が」

ジェイのこめかみから、額へゆっくりと一筋の汗が滴ったのを、フィリアスは知らない。

災禍の種（3）（前書き）

視点が何度か切り替わります。

災禍の種（3）

夜の静寂（しじま）は、普段なら穏やかな闇を湛えて人々に安息を齎（もたら）すというのに、今フィリアスが肌に感じる気配は、びりびりと次第に痛いものへと変貌してゆく。

全身を思わず強張らせるようなその気配に追われるようにして、微かに痺れの残る身体を叱咤しながら、フィリアスは走る速度を増した。

早く、早く、もっと早く！

急がなければ、ジェイが危ない。

バッシェ達がフィリアスの血を使い、何を召喚しようとしていたのかはフィリアスに分かる筈もない。ただ、静寂にあって心臓を鷲掴みされる程の錯覚を抱かせるこの緊張感が、《幻獣界》から単なる下位のモノを呼び出そうとしているのでは無い事は、否応にも感じられる。

召喚に失敗した場合、召喚されたモノは怒り狂い”対価”を払った者と、召喚者に襲い掛かる。望んだ事では無いが、”対価”を支払ったフィリアスに本来であれば矛先が向く事をジェイが抑えてくれている以上、牙は確実にジェイにも向くのである。

暗い森の梢から、微かに見える大鐘塔（グランドベル）の先端を道標にして走っている為、上を見上げる度に地面へ張った根に足を取られながらも、フィリアスは先程から心配そうに周囲を乱舞する、小さな妖精（フェアリー）の姿をした風の精霊へ荒ぐ息で懇願した。

「おね、がい！ヴィルに――ううん、誰でもいい！知らせて！」

フィリアスの言いたい事が伝わったのか、コクリと首を頷かせると風の精霊達は風を纏って姿を消した。それを確認すると、フィリアスは心臓が跳ねるのを構わずに年齢を重ねた樹の合間を走る、走る。

精霊達を見る事の出来る者はとても少ない。けれど、此処は優秀な魔導師達の集う学院なのだ、友人のヴィーツェルアや上位魔導師（ハイウィザード）ともなれば、姿は見えずとも常と違う精霊のざわめき、大気の揺らぎを肌に、自らの内に宿す魔力（マナ）に感じる筈。

フィリアスが学院へと辿り着き、事情を全て説明してから召喚魔法陣のある場所へ連れて行くには時間が少しでも惜しい。

頬から顎に流れる汗を拭う事もせず、ひゅうひゅうと枯れ始めた息をそれでも無理矢理に飲み込むと、フィリアスは段々近付いて来る大鐘塔（グランドベル）――学院へと、力を振り絞り尚駆ける足を速めた。

●●●●●

「くそっ……」

思わず、貴族にあるまじき低俗な言葉がジェイの口から漏れ出した。

だが、それも致し方有るまい。見えざる狂気の手を取ってしまったのが、入学したての魔導師（ウィザード）や一般的な魔力（マナ）を持つ者なら、そもそもこの召喚陣自体が拒絶してこの召喚は失敗に終わる筈であった。

しかし、バッシェ含む三人は、ジェイよりも下位に位置するとて魔導師を多く排出する貴族の出自。なまじ妄執に憑かれた強い思念

は、普段なら耳を貸さぬ存在すらも、時に振り返ってしまう。
それが一般人を巻き込んだ今この只中とは。
珍しくはあるが、さして魔力（マナ）が高いとは思えない薄桃色の瞳を戸惑いと不安、そして混乱に瞬かせていた人物を脳裏に思い描き、バッシェは小さく舌打ちを響かせた。
「まさか、俺があの落ちこぼれを庇う日が来るとはな……」
口元に浮かべた笑みには苦いものが混じる。
そういえば、あんなに疎ましいと思っていた薄桃色の瞳が、先程の刹那に美しいと感じたのは、ただの錯覚だろうか。
召喚陣から漏れる光が、炸裂し――森全体が眩い光に包まれた。

●●●●●

「フィリアス君！風が知らせた、一体何が……」
「ヴィル……っ…！魔導師（ウィザード）が、召喚魔法を、しよう…と……」
存外にあの場所から学院まではかなりの距離があり、森から講堂が集まる区域に出た時にはフィリアスの息は絶え絶えであった。願い通り、風の精霊がヴィーツェルアや他の魔導師達に異変を伝えたらしく、慌てて駆け寄ってくるヴィーツェルアの腕にしがみ付きな

がら、一緒に出てきていた”師”達へ震える声で告げると、それだけで皆は何が行われているのか察したらしい。
顔色を変え、慌てた様子で其々が行動に移そうとした刹那、夜の闇が光に圧倒されて、一瞬世界は白昼夢の如く白一色に染まった。

「――ッ！？」
「まさか、”月代（つきしろ）の君”！？馬鹿な！」
「何というモノを！」

水面に波紋が拡がるように、思わず膝を折りたくなるような重圧感が森から見えない波動となって全員の肌に襲い掛かる。
師達さえも微かに呻きながら身体を震わせる程なのだ、思わずフィリアスがヴィーツェルアへふらりと身体を揺らがせたのは些か致し方有るまい。だが、あの場所でこの気配を直に当てられているだろう人物が浮かび上がると、フィリアスは気遣わし気なヴィーツェルアの手から離れ、再び森へ、その向こうの召喚魔法陣へ向かうべく足を踏み出した。

「フィリアス君！君は此処に……！」
「ううん、駄目だよ、ヴィル。　この召喚は、私の血で喚ばれたの……そして、私が助けを求めにいけるように、残ってくれた人が居るから」
「君の血が？……成程、だから”月代の君”も耳を貸したのか」

ヴィーツェルアはフィリアスが精霊と対話できる事を知っている。
普通なら、一般人如きの血で、と笑うところを真剣な顔で頷くと、森の奥へ険しい視線を向けた。しかし、すぐにフィリアスが行けぬよう手を伸ばして、フィリアスの腕を掴んだ。

「ヴィル！　私、行かなきゃ」

「呪文（スペル）を唱え、魔法も使えぬ君が戻ったところで、何が出来る？」
「それは……っ…」

厳しい視線と合わせる事が出来ずに、フィリアスの視線は地面へと落ちた。
上手く言葉に出来ない歯痒さに、軽く唇を噛む。言い返せない。
呪文（スペル）を唱え、風を足に纏って疾風の如く森へと入って行く師達を他所に、フィリアスとヴィーツェルアの間には、奇妙なまでの静けさが漂っていた。

「……フィリアス君。　君が、その魔導師（ウィザード）を助けたいのなら、無詠唱（ノンスペル）を使いなさい」
「ヴィル……でも、でも……わたし」
「君は自分の力では無いと言うが、紛れも無く君の中に眠る力だよ――君が過去の事に縛られてその力を恐れる限り、君自身が精霊達を恐れている事になってしまう」

喉がカラカラに渇いて、言葉が出ない。否、例え喋れる状況であっても、強い光を湛えた瞳で問い掛ける友人に返す言葉は、今のフィリアスには無かった。
何より、フィリアスは金槌で頭を殴られたような衝撃に呆然としていた。精霊達が見えている事に安堵して、心優しい友人達の存在に甘えて、都合の悪い事から目を逸らしていたのは、他でも無い自分ではないか。

「精霊達と意思を交わす君の血で喚ばれたのなら……恐らく、《幻獣界》のモノを制する事が出来るのは、君だけだ。　失敗すれば陣を作った者だけでなく、この学院――王都にも被害が出る」
「……！」
「感じているだろう、たった”一人”呼び出しただけで、世界が此

程までに震えている」

大気に滲む圧倒的な威圧感、重圧感。触れれば切れる程の、緊張感。

こんなものを垂れ流している存在を、制せるというのか。フィリアスは自分に課せられた試練を恨めしく思ったが、すぐに意識を切り替えた。ヴィーツェルアは嘘を言わぬ。

自分の弱気一つで、守ってくれたジェイも、師や友人、そして何より王都の城にいる大切な人を傷付けてしまうのは、絶対に我慢ならない。

「私は、君を”化け物”などとは思っていないよ。　ちょっと落ち着きがなくて、慌てんぼうで、でも誰よりも精霊を……この世界を愛している、私の友人だ」

若草色の瞳が柔らかく、撓められる。

ああ、自分にはこんなにも素敵な友人が居てくれるじゃないか。

「――行ってくるね、ヴィル」

「ああ、もう此方へ来ているとは思うが……私はミルフェリア君を呼んで来よう」

この状況にしてはそぐわないが、柔く口元を綻ばせる友人にフィリアスも笑みを返すと、視線を森の奥へと向けた。眩い程の光は既に無いが、陣のある方向からは未だに強い気配が衝撃波のように発生している。

一度息を吸い込むと、フィリアスは精霊達へ、世界へ向けた言葉を紡ぎ出した。

「――今まで、怖がっていてごめんね。　少しだけ、私に力を貸して。　皆を、助けたいの」

『おかえりなさい』

そう、誰かが笑い掛けた気がした。

●●●●●

ふっ、と微かな残光の煌きを残して、フィリアスは一瞬で掻き消えた。

「相変わらず、規格外な事を容易くしてくれるね……」

まさか転移魔法とは。

風と時の魔法を使った高等連携魔法（ハイコンビネーション）と呼ばれる転移魔法は、”風の詠み手”の二つ名を持つヴィーツェルアとて、長い呪文（スペル）を紡がなければ発動させる事が出来ない。高難易度の魔法だというのに、たった一言、それも唯の言葉で瞬く間に術式を発動させてしまうのは相変わらずというか何というか。

ヴィーツェルアは小さく笑うと、森では無く一人の少女と合流する為に学院へと駆け出した。

夜を統べるもの（1）

――静寂、静謐（せいひつ）。

夜の森は、ひっそりと。

否、まるで異なる存在の来訪を怯えているように、静まり返っていた。

精霊達の力を借り、森の奥に位置する魔法陣の傍へ転移したフィリアスは、樹々の向こうから滾々（こんこん）と湧き出る泉のように、寒気がする程の重圧感を漂わせている存在へ思わず身震いをした。

人間では、ない。人間には絶対に出せない、気配。

この存在を怖いと思うのに、不思議とフィリアスは誘われるようにして足を前へと動かした。

夜が、佇んでいる。

闇のような、それでいて月のような、果てしない深さ。

目を逸らせぬ存在感を持っているのに、ふと存在があやふやになる曖昧さ。

開けた空間一杯に描かれている魔法陣の丁度中央、ゆらりと佇む人……人の形をした、”何か”がフィリアスを見ていた。一度見た

だけでは、単純に闇色の長衣(ローブ)を身に纏った長身の人物に見えるだろう。だが、その人物には服と思わしきもの、そして肌との継ぎ目が存在していない。
風に揺れる長衣(ローブ)は裾がゆらゆらと闇そのもののように揺らいでいるし、肌も頬や顎の輪郭が時折ゆらりと形を崩す。銀色の髪も不安定に揺らいだと思ったら、長さを変える。唯一変わらないものといえば、人間であれば目の部分にあたるものか。

一応、両目として作られたようなのだが。
その瞳は白目や黒目、瞳孔が一切存在せず、全て銀――月の光に似た色を湛えていた。
人間では有り得ない目や姿を見た瞬間、今迄抱いていた恐ろしさをフィリアスは感じなくなって、思わずその存在を凝視した。見惚れた、と言った方が正しいかもしれない。
だが、ふと視線が《幻獣界(エルス)》からの使者ではなく、少し離れた場所で横たわる存在に気付くと、フィリアスは全身の血が下がる思いで名を叫んだ。

「……ジェイ！」

綺麗な銀髪は今や無残に乱れ、ほつれて地に広がっている。
どこか怪我をしているのか、彼を中心にして地面には不吉な黒がじんわりと滲んでいて。
名を呼んでも反応が無い……もしや。フィリアスは心臓を掴まれた心地になった。

思わず其方へと駆け寄って、傍に跪く。
血で汚れた顔は苦痛に染まっていて、一瞬フィリアスはヒヤリとしたが、ごく浅く呼吸をしている事に思わず胸を撫で下ろした。しかし、次の瞬間、身体が硬直する。

音もなく、気配すら感じさせず、”月代(つきしろ)の君”と魔導師(ウィザード)達から呼ばれる存在は、何時の間にかフィリアスの傍らに佇んで、じっと月色の瞳にフィリアスとジェイの姿を反射させていた。

ジェイの事ですっぱりと抜け落ちていたが、この存在は図らずともフィリアスの血によって喚ばれた存在であり、召喚に使用された陣は間違った、歪なもの。《幻獣界(エルス)》に住むモノは非常に誇り高く、もしも彼等の望まざる形にて、誇りを汚す形で呼び出された時――怒り狂いて、術者達を喰い殺すという。

ジェイが満身創痍状態である事からして、この月を思わせる存在に害されたと見て間違い無いだろう。周囲を見渡してもバッシェ達三人の姿は見えないし、転移魔法を使用した為にどうやら魔法陣へ向かっていた師達をも追い抜いてしまったらしい。

助けは、期待できない。この存在が瞬きをしただけで、或いは手を振っただけで、フィリアスの命は一瞬で終わるだろうから。

危機感が振り切れ過ぎると、人は逆に冷静になるようで、うわあどうしよう等といっそ他人事のようにジェイを抱き締めながら月色の瞳を見上げていたフィリアスは、ふと感じた違和感に戸惑いを含めて小さく眉を寄せた。

見られている……違う。

観察、されている？

先程からフィリアスの瞳に映っている存在は、傍に移動こそすれ、直接何かをしてくる事はない。襲う素振りも全くないし、じいっと不思議な目でフィリアスの行動を眺めているだけなのである。

魔導師(ウィザード)から”月代の君”と呼ばれているらしいこの存在が、どれ

ほどに危険なものなのかは知らないが、顔色を青褪めさせていた様子や最初の異様な雰囲気。腕の中でぐったりとしているジェイから、てっきり怒り狂っていて喰らいに来ると覚悟していたのだが。
だとしても、こうも不思議な目に、あるいは不思議な存在に凝視に近く見下ろされ続けているのは心臓に悪い。ジェイの怪我だって治したいし、如何すべきだろうといい加減途方にくれてきたフィリアスの耳に突如として響いた声に、ぎょっと目を見開いた。

――汝　精霊ノ愛シ子カ

正確には耳ではなく、フィリアスの脳裏に声とはまた違う、”言葉”そのものが響き渡っている。体験した事はないが、これが念というものだろうか。
フィリアスが慄然として返事を寄越さない事を不思議に思ったのか、”月代の君”は首のあたりからくにゃんと身体（と思わしきもの）を傾けた。何とも言えず、シュールである。

――我　ノ言葉、分カラヌカ
「いえっ、どういう仕組みなのかしっかりはっきり分かります！」
男性の声でもなく、女性の声でもなく。幼くもなく、老いてもなく。
ただ、言葉として脳裏に響く言葉に戸惑いこそ覚えても、聞かれている以上答えない訳にはいくまい。壊れた人形宜しくガクガクと首を縦に振ると、フィリアスは夜の静寂（しじま）に自分の声を高々と張り上げた。

――愛シ　子ヨ、汝ヨリシロ　ニ使ワレタナ

――愚カシイ人間共、我ガ此方ニキタノハ汝ノ呼ビ声トイウノニ

いえ私は決して貴方様のような方を呼んだ覚えはありません！と心の中でフィリアスは悲鳴を上げたが、それを口にする事等出来る筈もなく、ただ口角が微かに引き攣っただけであった。

――彼奴ラノ名デ　作ラレシ陣ナド、塵ニモ等シイ

――ダガ、愛シ子ノ気配ハ　稀　デアッタ

――故ニ、我ハ　声ニ応ジタノダ

精霊の愛し子というのは、恐らく精霊達を見る事が出来る者の事を指しているらしい。

それならば、自分も含めてイクトゥースもだろうかと飛ばしかけた思考を引き戻したのは、腕の中で苦し気に吐息を零すジェイの存在だった。血に濡れた銀色の髪が重たく揺れる度にフィリアスの心は澱のように淀みを増し、彼を抱く手にも力が篭った。

「私の血で、来てくれたのなら……どうして。　どうしてこの人を傷付けたんですか！」

今のフィリアスには、異界の住人である存在に対する恐怖等微塵も無かった。ただ、抑え難い怒りに声も微かな怒気を帯び、震えを滲ませる。それに対して、月色の存在は曲げた侭であった身体をゆらゆらと元に戻しただけであった。フィリアスの脳裏に、不思議そうな響きを感じさせる言葉が揺らぐ。

――否　否、　我ハ何モシテオラヌ

――我ハ　見テイタ　ダケ

――愚カナ　術師ハ我ヲ見テ　恐レタ

――彼ヲ贄ニ　ト

何ということを！では、ジェイの怪我は全てバッシェ達がした事なのか。
自らで画策し、召喚しておきながら、呼び掛けに応えた《幻獣界（エルス）》の者を拒絶しあまつさえ人を傷付け逃げ出した……？

これが、
これが自分の目指している魔導師（ウィザード）？

血と泥で汚れたジェイの顔は、未だ苦しげに歪んでいる。
その顔を見下ろす視界も次第に歪み始めてから、フィリアスは自らが泣いている事に今更ながらに気付いた。ぽたぽたと頬を伝う涙がジェイの顔に落ちてゆき、涙の触れたところから微かな光の粒子が輝き始めた。

フィリアスはまだ何も願っていない。祈っていない。
だというのに、まるで嘆きを慮（おもんぱか）っているように、光の精霊達がフィリアスの涙から生まれ、ジェイを光で包んでゆく。眩しくはないが、光に乏しい森の中では決して無視の出来ぬ暖かな光。癒しと平穏と、そして安らぎを司るもの。

次第にジェイを包み始めた、暗い気配は退けられたとフィリアスは確信した。ほう、と苦しく、弱々しいものであった呼吸を、ゆったりとした穏やかなものへと落ち着かせる。
額に張り付く銀色の髪を整えてやりながら、笑ったような響きを持たせる”月代の君”へフィリアスは薄桃色の瞳を持ち上げた。

——面白イ
——久シク見ヌ　精霊ノ　愛シ子ヨ
——汝ナラバ、我ノ　退屈　満タスヤモシレヌ

夜を統べるもの（2）

――汝ハ　実ニ面白イ　色ヲシテイル
――人間ノ命ハ短イ　故
――ソノ間　人ガ主ト成ルモ良カロウ

銀色とも金色とも表現し難い月色の目を撓ませて、《幻獣界（エルス）》の住人は表情の分からない顔に、確かに笑みを浮かべたとフィリアスは感じた。
だって、単調で平坦な言葉が”楽しそうに”響いてくるのだから。

――汝ノ往ク　末、見届ケヨウ
――我ハ　”ベルベリトルティリゥス”
――月ニシテ　闇タル眷属

ベルベリトルティリゥス……それが、”月代（つきしろ）の君”と呼ばれているこの存在の、名前なのだろうか。随分と長い気がする。
沢山の事が起こり過ぎて、飽和状態気味のフィリアスは最早驚く事も無くぼんやりと月色で闇色の不思議な存在を見上げていたが、ベルベリトルティリゥスの姿を形どる長衣（ローブ）がサラサラとまるで砂のように地面へ落ち、月色の煌きを残す光景に目を丸くした。
「何――……！？」
何が、と最後迄は言葉を紡げなかった。

サラサラ、サラサラと姿を崩してゆく月色の人型は、次の瞬間ぶわりと一気に闇を広げて、フィリアスを包み込んだのだ。黒い敷物を頭からすっぽり被せられた状態だと言えば想像しやすいだろうか。一瞬で闇に包まれたフィリアスは、何も見えないとの想像に反し淡い瞬(またた)きが存在する事に気付いて、何度か目を瞬(しばた)かせた。

なんだろう？

急に視界が閉ざされたせいで、目が慣れていないだけかもしれない。

だが、最初こそ気のせいにも思えた小さな光は、フィリアスが思考に耽っている間にも急速に光の強さと大きさを増してゆく。そして、闇を光が覆い尽くし、フィリアスの視界も白一色に染まった瞬間――ぱしん、と何かが割れる音がして、世界は元通りの森に戻っていた。

地面に残る、召喚魔法陣は燻ってはいるがその侭だし、ジェイの怪我はもう治癒しているが、未だにぐったりとして腕の中で眉をぎゅっと寄せている。

それでも死の森のようだった学院の森には、密やかではあるが動物や風の息遣いがひっそりと漂ってくるし、精霊達のざわめきも大きくなった。ああ、そうか、”皆”が恐れていた存在が居なくなったから。

何処に消えてしまったのだろうと不思議に思ったフィリアスは、右の手首にビリッとした痛みを唐突に感じ、仰天して顔の前に右手首を持ち上げた。最初こそ汚れか何かと思ったのだが、何時の間にかフィリアスの右手首をくるりとブレスレットのようにして、這う模様が存在していた。

淡い銀色の、蔦のように這う模様。その色は先程まで会話をして

いた、《幻獣界》の住人のようで……試しに小さく名前を呼んでみたら、小さく模様が震えた気がした。
これは、もしかするとフィリアス自身全く以って信じ難い事だが、不完全な陣で呼び出した《幻獣界》の住人を従えた、事になるのだろうか。

従えた、というのは少々、いやいや多大に語弊がある気もするが。
それにしても、随分自分は”面白い”存在であるらしい。まあ、フィリアスに興味を持ってくれていなければ、あっという間に屍の山となっていた予感しかしない為、その点に関しては大感謝なのであるが、面白がって自ら従属するというのも、如何なものなのだろう。

「これは――、一体何が？」

耳元で囁く精霊達の声に、フィリアスは深く沈んでいた思考を表面へ浮上させた。どうにも切羽詰ると考え事に耽ってしまう癖があるようだ。自重自重、今はやるべき事が沢山あるのだ。
学院の師が着る長衣（ローブ）に身を包んだ数人の師達が、森から広場へと出るなり戸惑ったように顔を見合わせる様を見た後に、薄桃色の瞳は腕の中のジェイへ落ちる。まずは、この人をゆっくりと休ませてあげなければ。

「そなたは……何故此処に？我等よりも後に居た筈では」
「……精霊達にお願いして、転移させてもらいました」

フィリアスの姿を見て、訝しげに眉を顰める師達へ、ほんの少しの躊躇いを隔てた後にフィリアスは曖昧にはぐらかすのでは無く、

嘘偽り無い事実を伝える事にした。途端に目を丸くする皆の瞳に恐れが浮かぶ事を内心で怯えていなかったと言えば、それは嘘になってしまう。もう、自分の”力”から、精霊達から目を背けないと決めたのだ。

だから、告げる瞬間も真っ直ぐに前を向いて、はっきりと告げる。

「私は精霊達の姿を見る事ができます。　……召喚された”月代（つきしろ）の君”は、私と共に在る事を認めてくれたから――此処に」

師達にも見えるように右手を翳すと、手首をぐるりと囲う銀の蔦が微かに揺らぐ。

其れを見た師達は慄いた。まさか、魔導師（ウィザード）でもない、少女が、と。

「この人の怪我も治していますが、血を失っています。　何処か、休ませてあげてくださ……」

フィリアスの腕に抱く青年を言及した瞬間、フィリアスは唐突に自分が酷く疲労している事に気付いた。熱に魘（うな）されるように、頭や身体が熱く、手先はとても冷たく――そして、とても眠い。

ぐらぐらと視界が揺れて、たまらず地面に片手を着く。驚いたような声で師達が何かを言っているが、フィリアスにはそれが言葉としては認識出来ない程に、意識が朦朧としていた。

確かに王都での逃走劇から始まって、随分と体力を消耗している感覚はあるが、こうも唐突且つ急激に体調不良を覚える程、貧弱な身体では無いつもりなのだが。

――我ノ力ト　汝ノ力

――馴染ム迄　些カ時間ヲ要ス

――其ノ影響デ　アロウ

ベルベリトルティリゥスの”言葉”が脳裏に響き、フィリアスは漸く自分の状況に納得した。成程、自分の身体に異世界の存在を受け入れているのだ、自分の身体も困惑しているのだろう。それにしても、今すぐ瞼がくっつきそうなくらい、眠い。

「フィリアス君！」

ああ、ヴィルの声だ。

聞き慣れた声が、フィリアスの安堵を誘う。意識がゆっくりと沈んでゆくに合わせて身体も傾斜し――其処で、完全にフィリアスの意識は閉ざされた。

●●●●●

「……不具等では、無いではないか」

グラリと傾ぐ身体を素早く受け止めたのは、フィリアスの腕に抱かれていた青年……ジェイであった。失血による回復は出来ない為、流石に顔には疲労の色が色濃く滲んではいるが、薄桃色の瞳を閉ざして眠る顔をじっと見下ろす表情は、苦虫を噛み潰したようなものだった。

「フィリアス君！」

”風の詠み手”たるヴィーツェルアが急いたように駆け寄ってくる。何時も腹の読めない笑顔で飄々としている事が多い彼にしては、随分焦燥を見せるものだ。
オマケに先程から騒ぎ立てる師達が軋む身体と、頭に響いて酷く不愉快に感じ、ジェイは微かに眉を顰(ひそ)めると、ぐったりとしているフィリアスの身体を抱き上げて、立ち上がった。

「この娘、今宵は俺の屋敷に連れて行こう。　学院からならば、俺の屋敷が一番近い」

驚く程軽い身体。食べるものはきちんと食べているのだろうか、と余計な詮索が小さく頭を過ぎるが、其れを頭の片隅へ追い遣ると、反論を許さない声で告げてジェイはさっさと夜の森を歩き出した。

「だが、ジェ……」
「こんな娘にどうこうしようとは思わぬさ。　気になるなら、明日の朝、俺の屋敷へと来ると良い……”風の詠み手”」

艶の無い灰色の髪も、白くはあるがさして美麗でも無い普通の顔も、何一つとして突出した良点に恵まれて居ない少女。だというのに。
腕の中の重みは軽く、少しだけ苦しそうに睫毛を震わせる姿は儚くて。

薄桃色の瞳が開かれていないことに、微かな苛立ちを覚えるのは何故だろう。

「……不具、などでは、無いではないか」

優しい朝（1）

フィリアスは目の前に所狭しと並べられた朝食の数々を前にして、途方にくれた。

新鮮な野菜をふんだんに使用したサラダ、スクランブルエッグ、ソーセージにカリカリのベーコン、十種類以上はありそうな程大皿に上品ではあるが山盛りで盛られたフルーツにスープ、焼きたてのパンもプレーンのものから子供が喜ぶ甘いパンまで数種類用意されている。確かに、どれも非常に美味しそうで、食欲を誘うのだが。

朝食を抜きにする事も日常茶飯事なフィリアスにとって、如何せん多過ぎる量であった。どれから手を付けたら良いのか分からない、というか食べても良いのか。

「……どうした、食わぬのか」

そして、煩悶（はんもん）するフィリアスの最大の原因は、先程からテーブルを挟み反対側から凝視する視線を隠そうともせず、フィリアスの一挙一動を見守る青年の姿にあった。

「……い、いえ、いただきます……」

先程からフォークを握り締めた侭、どうして良いのか分からず凝固しているフィリアスがお気に召さないらしい。整った相好を微かに崩すと、眉根を寄せながら問い掛ける声に、弾かれたようにして顔を上げると、フィリアスは慌てて手近な皿を引き寄せてソーセージを口にした。

ボイルされたソーセージは歯を立てると、薄皮から肉汁が溢れ非常に美味ではあるのだが、正直言って今のフィリアスには極度の緊

張で食べた気も味もしなかった。

なにがどうして今の状況なのか誰か説明して欲しい。

確か、昨夜は召喚魔法陣によって喚び出された”月代(つきしろ)の君”ベルベリトルティリゥスの気紛れでフィリアスが主となったところまでは覚えている。駆け付けた師達に状況の説明をしている内に気を失って――目を覚ましたら、フィリアスが今迄生まれてこの方見た事も無い程豪華な部屋に寝かされていて、危うくまた気絶するところだった。

まさか此処が天国というやつだろうか等と呆然(ぼうぜん)としているフィリアスを他所に、扉の前で見張っていたのですかと思わず聞きたくなる程のタイミングで侍女達が雪崩れ込んで来ると、あれよあれよと言う間に風呂場へ連行され髪を整えられ絹で作られた最高級の服を着せられ化粧までされて、今に至る。

サラサラとした肌触りの衣服は普段着慣れている綿の感触とは天と地程の差があり、何か粗相をして汚してしまったらと考えると、非常に恐ろしい。何より、人には食べろと勧めるくせに、自分は一向に食事をする気配を見せずに珈琲だけに口を付ける青年……ジェイの存在が大きすぎる。

一般人のフィリアスからして見ても明らかに高級品だと分かる服を違和感無く着こなし、若干怠惰というか退廃的というか、或いはにじみ出る威圧感というか、兎も角明らかに貴族だと思われる屋敷に彼なのだ。緊張するなというほうが難しかろう。

しかも、ジェイは先日市場(マーケット)で魔法を使用し、フィリアスに水を掛けている。昨夜は動乱の中だった為、百歩譲って致し方なかったとしても、フィリアスに対し友好的とは到底思えなかったのだが。それが何故、こうも凝視されながら食事の席を共にする羽目に陥っているのか、フィリアスは少々泣きたくなった。

「あの……」
「何だ」

精一杯の勇気を掻き集めて恐る恐るフィリアスが問い掛けても、そっけない声でばっさりなのだ。何だ、というよりも現状を説明するほうが先ではないのですか！と心の中でフィリアスは喚いたが、実際声に出す程愚かでは無いので、微かに表情を引き攣らせながらも、ありったけの勇気を集めて口を開いた。

「ど、どうして私は今ここにいるのでしょうか……」
「朝食を摂る為だろう？」

駄目だ、根本的に会話がかみ合わない。
少し驚いたように薄い蒼の瞳を見開いた後、心底不思議そうな声で言われては最早言い返す気力すらフィリアスには残っておらず、頭をがっくりと項垂れさせた。
だが、次に脳裏へ過ぎった疑問に顔を持ち上げて此方を見る瞳に薄桃色の瞳を重ねた。

「怪我は、もう痛みませんか？」

そう。今でこそ顔色は良いが、昨夜彼はフィリアスが精霊達の力を借りて治癒していなければ結構に危険な状態であったのだ。ベルベリトルティリゥスの話によれば、バッシェ達から受けたという怪我――身体の傷は癒えても、血と心の傷迄はすぐに癒す事が出来ない。
一見すると平気そうな顔をして、その実体調が優れないのではないだろうか。

「……何故、そう思う。　怪我ならお前が治しただろう」
「え。　……あ、あああの、知って……！？」

激しく動揺し過ぎて、思わず声が裏返ってしまった。
フィリアスがジェイへ質問した筈なのに、逆に質問し返された言葉に一拍の間を隔てると、フィリアスは露骨に狼狽え始めた。あの時ジェイは意識が無いとばかり思っていたのだが、どうやらそうではなかったらしい。
絵になる様でゆったりと珈琲を一口啜ると、ジェイは軽く片眉を顰めた。

「ああもボタボタと涙なんぞ降らされては、嫌でも目は覚める」
「うっ……すみません……」

まあ確かに、色々と粗相をした気がする。何か言い返そうにも、ジェイの言う事はもっともであった為、結局フィリアスは軽く身体を縮こまらせてひたすら恐縮するのみであった。
しかしながら、ふとジェイの視線があらぬ方向へと向かい、何やら物言いたげな様子に疑問が浮かぶ。はて？良く見れば、彼の頬が少しだけ朱に染まって……いるような。

「……――礼を言おう」

思わず目が点になった。
本人から直接聞いた訳では無いが、十中八九ジェイは貴族だ。ヴィーツェルアやミルフェリアも貴族ではあるが、彼等を例外というか少数として、貴族というのは酷く矜持（プライド）が高い者が多い。魔導師（ウィザード）でもなくただの一般市民であるフィリアスに貴族が礼を言うなどとは考えにくい。というか普通ならまずない。
対応が遅い、と叱られたり罵られたりはされるかも、と考えてい

たが、まさか礼を言われるとは。まあ、「ありがとう」では無くて礼を、というところが如何にも彼らしいが。何だ、思っていたよりも存外に良い人ではないか。

「いいえ。　お礼を言うのなら、精霊達へ言ってください。　私が何かをする前に、皆が貴方の傷を癒してくれました」

「……そうか」

微笑みながら否定するフィリアスの顔を見て、ほんの少しだけジェイの表情も和らぐ。

多少なりともジェイの人となりを垣間見れた気がして、朝食に手を付けるフィリアスの心も先程に比べると軽いものになった。フィリアスが呪文（スペル）を唱えずに魔法を発動させたところだって見られているようだし、腹をくくった現在では、ジェイからの視線も敵意を感じられない為苦痛には感じない。

ふわふわの白パンを一口サイズにちぎり、口へ放り込みながら、そういえばと改めてフィリアスはテーブルを挟んで目の前に座るジェイをまじまじと見詰めた。

まるで月光をふんだんに浴びた夜露のように、流れる髪は銀。けぶるような睫毛の下からは、彼の持つ藍玉（アクアマリン）と同じ薄い蒼の澄んだ色が朝だからか現在は少々眠たげに伏せられている。

窓際から差し込む清々しい朝日の光に淡く照らされる様なぞ、絵画のよう。ジェイと相対する時は、何やかんやでじっくり彼の顔を見る機会が無かったが、こうやって見るとかなりの美形である。さぞや世の女性達が放っておかないだろう。

「何だ」

「へっ！？え、いやっ、その……あ！私、フィリアス・アイシェールと言います。　貴方の名前を聞かせてくれませんか？」

余程にフィリアスはジェイを凝視していたらしい。唐突に伏せていた視線が薄桃色の瞳に重なると、フィリアスは目尻を大きく見開き、視線をあちらこちらへと彷徨わせた。それから、如何にも取って付けたような笑顔を浮かべると、軽く首を傾けた。

そういえば、彼の本名をフィリアスは知らない。「ジェイ」という名は愛称だろう。容姿といい、魔力（マナ）の強さといい、豪奢な屋敷に住んでいる事といい、貴族である事は間違いなさそうなのだが。

「ジェイと呼べ」

「……それって愛称じゃ…」

「――ジェイ。ジェラルディアス・フォン・ロートリゲン」

優しい朝（2）

フィリアスは笑顔を固まらせた。”ロートリゲン”と言ったかこの人は？

余り貴族の名等に詳しくもない一般市民のフィリアスですら、聞いた事の有る家名。

「ろっ、ろろろろろろーとりげ……！？」

「驚きすぎだろう。　お前が名を言えと言ったのに」

椅子から軽く仰け反り、露骨に驚くフィリアスが面白いのか少し瞳を細めてテーブルに片肘を着くと、ジェイ……ジェラルディアスは意地悪気に口角を持ち上げて見せた。だって、ロートリゲン家と言えば、王家の次に位が高いと言われている公爵家で、古くからの大貴族ではないか！

とてもではないが、一般市民でも下っ端に位置するフィリアスは、普通なら一生のうち一度でも会う事も、ましてやこうやって食事を共にする機会も無い筈の、雲上人である。

まさか此処は、ロートリゲン一族の屋敷になるのだろうか。

フィリアスは軽く意識が飛ぶ感覚を覚えた。

王都での追い掛けっこから誘拐されて、ベルベリトルティリゥスを召喚されて、主になって――目が覚めたら公爵家のご子息と食事を一緒にする羽目になっている。

この部屋に比べると、物置にもならない自分の小さな部屋が、酷く恋しい。奮発して買った少々金額の張るとっておきの紅茶を淹れて、読みかけの本を片手に、窓際へ毛布を持ち込んで月明かりの下、精霊達と穏やかな時間を過ごしたい。

儚い願いすらも、此処数日突拍子も無い出来事（トラブル）の連続で叶えられておらず、フィリアスは心中でハラハラと涙を零したが、まさか大貴族のご子息であるジェラルディアスの前で其の様な事が出来る筈も無く、幾度か唇を開閉させるのみであった。

市場（マーケット）ではフィリアスを毛嫌いしていたというのに、森での一件を隔てて目を覚ましてみれば今の現状。水責め、火責め、それとも不敬罪で生皮剥がれる前に、とジェラルディアスが取り計ってくれた最後の食事かもしれない……などと、陰鬱（いんうつ）な思考に陥り、今のフィリアスは、酸欠過多で今にも息絶えそうな魚よりも、酷い顔をしているに違い無かった。

「お前はコロコロと良く表情が変わるな。　何を考えている？」

「いえっ、するなら一思いにと思いまして……」

「何？」

「な、なんでもありませんっ！」

いけない、顔に出ていた。

先程からしげしげとフィリアスの表情を見ていたジェラルディアスの声でフィリアスは我に返ると、思わず言って仕舞った本音をぎこちなく浮かべた笑みに隠して、今一番聞きたい質問を投げ掛けるべく口を開いた。

「あの、それでロートリゲン様」

「ジェイでいい」

「でも……」

どうやら呼び方が気に食わなかったらしい。

忽ち（たちま）の内に、端正な顔を少し歪めるジェラルディアスにこそ、フィリアスは慌てた。「ジェイ」と軽々しく呼ぶな、なんて言ったの

は貴方ですよ。とは言えない。
ううむ、どうにも心が弱くなって仕舞っている気がする。
「で、では……ジェイ、さ……」
様、と敬称を付けようとした事は早々にお見通しらしい。言う前に薄い青色の瞳がフィリアスを射抜くと、何とか出掛けた言葉を喉の奥に追い遣り、四苦八苦しながらも伺うように軽く首を傾けた。
ヴィーツェルアやミルフェリアと違って、長い付き合いでもない彼（しかも大貴族）を軽々しく愛称で呼べる程、豪胆（ごうたん）な性格ではないのだが。
だが、ジェラルディアスの不興をこれ以上買うのもいただけない。フィリアスは内心恐々としながらも、何とか声を絞り出した。
「それじゃあ、……ジェイ。　どうして貴方のお屋敷に？私、確か森で……」
「ボタボタ泣いたと思ったら、俺の上に気絶ときた。　邪魔で仕方無かった故、俺の屋敷にへ一緒に連れてきた」
「うっ……」
何とも、容赦の無い方である。いやいや、前から毒舌というか棘のあるという人だという認識はあったのだが。実際言い返す事が出来ない為、どうにも心痛が増えるばかりである。
それにしても、よくよく考えると、森にはヴィーツェルアや師達が居た筈であり、態々（わざわざ）貴族も貴族、大貴族であるジェラルディアスがフィリアスを屋敷まで連れてくる必要は無い筈なのだが……。
心中で発した疑問がまるで聞こえていたように、ジェラルディアスは端正な顔を少しだけ歪めると、フィリアスを凝視していた視線

をあらぬ方向へ向けて、多少不機嫌そうに口角を持ち上げて見せた。
「俺は、借りをその侭にするのは好かぬ。　誰であろうとな」
「借りって……」

借り、といえる程の事をした覚えは無いのだが。一体自分は知らない間に何をしたのだろうか？
何時迄経っても借りの意味を理解出来ないで居るフィリアスの様子に、ジェラルディアスは一つ大仰な溜息を吐き出してから、呆れたように目を細めた。
「それは素で分かっていないのか、それともお前にとって、アレは些細な事なのか？」

素で分からないだけです。

「命を」
「……は？」
「俺の命を、お前は救っただろう」
「……ですから、治癒なら精霊達が――」
「あの場にお前が居らねば、精霊達とて動かぬ。　今お前が従えている聖魔も、お前という存在が居たからこそ、誤った召喚魔法陣で喚びだされているに関わらず、恭順の意を示しただろう」

話題に上った事が分かるのか、フィリアスの右手首に這う銀色の蔦が、仄かに熱を持った。今は話さないのか、それとも話さないのか沈黙した侭のベルベリトルティリゥスが何を言いたいのかはフィリアスにも分からない。
ジェラルディアスに同意しているのか、否定しているのか。どちらにしても、フィリアスからしてみればベルベリトルティリゥスの

気紛れで”主”に認めてもらっただけであり、自分自身が何かをした、という気は無かった為慌ててしまう。

「……過ぎた謙遜(けんそん)は時に不興を招くぞ。　俺が良いと言っている、有り難く受け取れば良い」

何ともまあ、随分な言い様である。

だが、確かにこれ以上違うと言っても、対する本人がそう思っているのならジェラルディアスの好意を無碍(むげ)にする行為にも他ならない。

フィリアスは曖昧な笑みを弱く浮かべると、首を縦に振った。

昨夜から驚きやら何やらで衝撃的な事が続いたが、今この場所の暖かい空気や美味しい料理、そして分かり難くはあるがジェラルディアスの好意は本物だ。これからこんな贅沢な朝食を摂る機会に巡り合う事など、一般市民のフィリアスには絶対に無い。

言葉を借りる訳では無いが、存分に満喫しなければ！

躊躇いがちであった態度を変えて、喜々として食事の続きを始めたフィリアスをジェラルディアスは密かに盗み見ると、幾許(いくばく)かの後に歯切れ悪く口を開き掛けたものの、声が出るよりも前に食堂の扉が勢い良く開かれて、けたたましい音を響かせた。

「フィリアス君！」

「お姉さま！ご無事ですかっ！？」

「ヴィル！ミルリィも……？」

「騒がしい……」

”風の詠み手”の二つ名を持つ青年と、将来有望な魔導師(ウィザード)の少女。

フィリアスの友人である二人は、何時も身に着けている学院の長衣（ローブ）では無く、高級な布地で作られた貴族の衣服を身に纏っていた。といっても、余程急いでいたのか、二人とも少々衣服が乱れている。

珈琲の入ったカップを片手に、露骨に眉を顰（ひそ）めるジェラルディアスを余所に、二人は目を丸くするフィリアスを見つけるなり、走るこそしないが競歩並みの早歩きで近付いて来た為、フィリアスは思わず仰け反った。こ、怖い。

「フィリお姉さま、私……っ！心配したんですよ！」
「う、ええ？」
「怪我は無いか？変な事はされていないようだけど……」
「はい？」
「失礼な奴等だな。　こんな小娘、俺は何もせぬ」
「……」

ミルフェリアは何時も猪突猛進気味だが、ストッパー役でもあるヴィーツェルアが此処迄取り乱しているのも珍しい。どうにも噛み合わない会話にフィリアスは目を丸くしたが、不快さを隠そうともしないジェラルディアスの様子から、どうやら昨夜フィリアスが意識をなくした後に一悶着あったようだ。

「全く……学院での話等あてにならん……アイシェール、食事が済んだらその喧しい二人を連れてさっさと帰れ」
「は、はあ……」

やれ怪我は無いか、やれ何もされていないかと尚も質問攻めにする二人にジェラルディアスは辟易したらしく、苦々しい顔で珈琲を啜ると眉を顰めた。
心配してくれるのは嬉しいが、確かにこれでは落ち着いて会話も

出来ない為、思わずフィリアスも同情というか同意というか、苦い笑みを湛えて頷くに留めた。

何時も思うのだが、この二人、揃うと何かと最強なのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9587s/

ユーフォリアの大魔導師

2011年7月2日19時03分発行